

《特別寄稿》

生活科学部 20 周年・生活科学会第 50 回記念大会によせて

——家政学部から生活科学部へ——

An Article on the 20th Anniversary of Seikatsukagaku-bu and the 50th Annual Meeting of Doshisha-Seikatsukagaku-kai

——Change from the Faculty of Home Economics (Kaseigaku-bu) to the Faculty
of Human Life and Science (Seikatsukagaku-bu)——

森 田 潤 司
(Junji Morita)

今年 2016 (平成 28) 年、本学は創立 140 周年を迎えた。また、本学生活科学部は旧家政学部から名称変更して 20 周年を迎えた。さらに、同志社女子大学生生活科学会 2016 (平成 28) 年度大会は前身の同志社女子大学家政学会創立大会から数えて第 50 回の大会となった。来る 2017 (平成 29) 年には学会創立 50 周年を迎えることになる。

そこで、記念事業として同志社女子大学教育基金からの援助を得て、「生活科学部 20 周年・生活科学会第 50 回記念大会」が 2016 (平成 28) 年 10 月 8 日 (土) に盛大に開催された。

この記念すべき年にあたり、本学生活科学部および同志社女子大学生生活科学会の歴史を簡単に顧みることにする。変遷の大概は章末の年表 1～3 に示した⁹⁾³¹⁾⁴⁷⁾⁵⁸⁾⁷¹⁾¹⁰⁵⁾¹⁰⁸⁾。

●家政学部のあゆみ

本学生活科学部のルーツは 1876 (明治 9) 年に始められた女子塾および翌 1877 (明治 10) 年に開校した同志社女学校 (当初名称は同志社分校女紅場) にまで遡ることができるが、制度的にきちんとした形になるのは 1912 (明治 45) 年に専門学校令による同志社女学校専門学部が開校された際、英文科とともに置かれた家政科である¹⁾⁴⁷⁾⁷¹⁾。大正期の同志社女学校専門学部家政科と当時の学生の様子については別所秀子先生の玉稿¹⁰⁾に詳

しい。また、この頃の寮生活の様子は『同志社女子大学寮の 100 年』⁶³⁾で伺える。

同志社女学校専門学部は、その後、1930 (昭和 5) 年に同志社女子専門学校 (英文科・家政科) と改称されるなど変遷している。

大学としての出発点は、今から 67 年前、1949 (昭和 24) 年に、新学制のもと同志社女子専門学校を廃止して同志社女子大学 (学長 E. L. ヒバード) が設立された際、学芸学部 to 英文学専攻、音楽専攻とともに設置された食物学専攻である¹⁾⁴⁷⁾。当時の学則に、「本大学の性格及び組織は学芸 (リベラル・アーツ) の大学として形成される」とあるように、本学はリベラルアーツ主義の女子大学として発足した。この精神を生かすものとして主専攻 (メジャー)、副専攻 (マイナー) の制度があり、学生は英文学、音楽、食物学など専門領域を主専攻とするとともに、希望によって他の専攻を副専攻として幅広く履修できた³¹⁾⁴⁷⁾。その後、学芸学部食物学専攻は 1952 (昭和 37) 年に学芸学部家政学専攻と名称変更され、さらに 1965 (昭和 40) 年には学芸学部家政学科となっている。

そして、今から 49 年前の 1967 (昭和 42) 年 4 月には学芸学部から家政学部として独立し、家政学科 (50 名) と食物学科 (100 名) の 2 学科が設置された。この時、同志社女子大学家政学会が発会しており、3 月 1 日の卒論発表会当日に発会式がもたれたと記録されている⁴⁾⁴⁷⁾。7 月 9 日に第 1 回大会が開かれている⁴⁾¹⁸⁾³⁷⁾³⁹⁾⁶¹⁾。

学内学会については同志社大学などの学内学会やこの年の1月1日に発足していた同志社女子大学英文学会^{18) 62)}を参考にしたと思われるが、当時の方々が家政学会発足について書かれたものを読むと、まさにゼロからの出発のご苦労が伺える^{2)-7) 25) 37)}。英文学会や家政学会の経験をもとに、女子大学ではその後新しい学部・学科ができるたびに学会が設立されてきている。

ともかく、当時は、学部内^{18) 62)}に家政学の教育・研究を推進しようという機運があふれていた時期であり、翌1968(昭和43)年2月に学会誌『同志社家政 創刊号』が発刊されており、同年4月には大学院家政学研究科食物学専攻(修士課程)(入学定員8名)が設置されている。

その後、新しい展開を目指して、1969(昭和44)年には食物学科に食物学専攻と管理栄養士専攻が設置され、学科の充実が図られた。しかしながら、管理栄養士専攻設置について、他学科などから本学のリベラルアーツの精神にそぐわないと批判もあったと聞いている。今は昔の物語である。

●日本の家政学の確立と展開

ところで、日本に「科学としての家政学」が誕生したのは、1901(明治34)年に旧専門学校令によるものではあったが、日本女子大学が家政学部を設置したことに始まる。本学では遅れて1912(明治45)年4月に前述した同志社女学校専門学部(後に同志社女子専門学校と改称)に英文科とともに家政科が設置されている^{9) 47) 58) 71)}。

新制大学令による初の家政学部も、1948(昭和23)年に日本女子大学に設置されている。また、翌1949(昭和24)年に「家政学ならびにその教育に関する研究の促進と普及を図ることを目的」としてアメリカ家政学会にならった「(日本)家政学会 The Japan Society of Home Economics」が創設されたことで、日本にも名実ともに家政学が成立した。同志社女子大学が設立され、学芸学部食物学専攻ができたのはまさしくこの年のことである。

こうして家政学の教育と研究が活発におこなわれるようになったものの、家政学とは何か、家政学は学問か、など家政学そのものの意義を問う議論は続いた。ようやく1970年(昭和45年)になって、日本家政学会家政学原論委員会は初めて家政学の定義を公式に発表した⁹⁰⁾。これによると「家政学は、家庭生活を中心として、これと緊密な関係にある社会事象に延長し、さらに人と環境

との相互作用について、人的・物的の両面から研究して、家庭生活の向上とともに人間開発をはかり、人類の幸福増進に貢献する実証的・実践科学である」とまとめられている⁹⁰⁾。この定義はアメリカ家政学会の影響を強く受けたものといわれている。この当時まで日本には家政学の概念規定の確立がなかったわけである。

その後も、家政学には様々な分野があることから当然ではあるが、分野ごとに個別的な研究が分化的に進み、家政学に関わる者の中でも家政学の目的、対象、方法などについて一致がみられない状況は続いた。家政学の英語名 Home Economics に抵抗感のある研究者が多かったことも関係している。

1970年代に入ると、大阪市立大学が1975(昭和50)年に、続いて京都府立大学が1977(昭和52)年に、家政学部から生活科学部へ名称変更するという新しい動きが起こった。

1980年代になると、家政学の再定義問題が浮上してきた。そこで、1984年(昭和59年)に日本家政学会は「家政学将来構想1984」⁹⁰⁾において、家政学の定義を「家政学は、家庭生活を中心とした人間生活を中心とした人間生活における人間と環境の相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学である。」とした。この定義は前述した1970年(昭和45年)の定義を基盤としているが、家政学を「実践的総合科学」とした点が新しい側面である。

その後も家政学を問う議論は続くが^{94) 95) 96)}、1994年(平成6年)6月にアメリカ家政学会の名称が American Association of Family and Consumer Sciences と変更されたことにも即発され、再度議論されている^{111) 112)}。

●家政学部ばなれ

本学家政学部では、家政学・家政学部をめぐる全国的な動きのなかで、新しい時代の家政学部のあり方を目指して1977(昭和52)年の家政学科教員懇談会に始まり、1978(昭和53)年の家政学科検討委員会(委員長 玉置日出夫学部長)などで、協議が重ねられた(1989(平成元)年10月11日評議会資料)。

しかしながら、工業(場)等規制法^{注1)}や田辺校地間

注1 工業(場)等制限法は、「首都圏の既成市街地における工業等の制限に関する法律」(1959(昭和34)年制定)と、「近畿圏の既成都市区域における工場等の制限に関する法律」(1964(昭和39)年制定)の2法をあわせた総称である。また、それぞれの略称 〆

題など諸般の事情で大胆な改革には手がつけられず、カリキュラムの手直しに終わっていた。

1980 年代後半から、共学志向もあり、女子大学および家政学部志願者が減少気味となり、本学も無縁では無かった。また、「家政学部であるために、社会からはあたかも日常生活の家事技術面のみを研究・教育の対象とするものであるかの如く誤解され」、そもそも誰のための学問かなど質問をうけることもしばしばであった。受験生から「家」がついているのは古くさいという声もあり、家政学ならびに家政学部を理解してもらうことがなかなか難しい状況であった。

●家政学部と田辺（京田辺）校地利用問題

一方、本学独自の課題として田辺・今出川校地問題があった。ここで、家政学部を中心に本学の校地利用計画の変遷を見てみる。そもそも校地問題は、1956（昭和 31）年の大学設置基準の制定による校地不足に端を発したものであるが、本学においては 1967（昭和 42）年の家政学部の設置認可の際、文部省（当時）から「中心校地が狭隘なので－（中略）－同校地におけるいずれかの学校もしくは大学の教養課程もしくは専門課程の移転等適当な方法をすみやかに考慮すること」と認可条件がつけられたことで、法人全体で早急な対応が必要となった。しかしながら、工業（場）等規制法により京都市内での展開は制限されていたため、本学ではすでに法人が購入していた田辺校地を家政学部設置に向けて課外活動や体育施設として急遽整備した。しかしながら、その後も田辺校地使用は一部にとどまった。文部省（当時）の認可条件をクリアし経営安定化をはかるため、本学は田辺校地利用についての委員会を設置して検討を繰り返している。そのなかで田辺校地利用委員会（委員長玉置日出夫）の答申（1974（昭和 49）年 6 月 21 日）では、「1976（昭和 51）年に短期大学部を田辺校地に設置する。次いで家政学部の改組・移転、学芸学部の新学科を設置する」という将来計画が示されている。ただし、文部省（当時）には校地問題から短期大学部や新学科の設置は認められていない。

でもある。この法律の目的は、都市部に制限区域を設け、その制限区域内に人口・産業の過度の集中を防ぐことであった。具体的には「近畿圏」には京都市、「工業（場）等」には大学も含まれ、京都市内を含む都市地域での一定面積以上の制限施設（1500 平方メートル以上の床面積を持つ大学の教室）を新設又は増設増設してはならないこととされていた。

そのようななかでも 1976（昭和 51）年 2 月に家政学部の定員増が受理されている。これはこの年度限りの文部省（当時）方針「大都市の校地事情にかんがみ収容定員の変更に際して必要とされる校地面積について当該大学の教育条件等を総合的に判断して弾力的な取り扱いも考慮する」（1975（昭和 50）年 8 月 25 日付文部省大学局通知）に基づいて申請され受理されたものであるが、認可の際、再度「本部校地（中心校地）が狭隘なので校地全体の有効利用を検討すること」と改善条件がつけられた^{5b)}。理事会・本学としては、「都会地における校地割引きの特例」を適用すれば今出川校地で基準面積の 2 分の 1 を満たしているとしての申請であったが、文部省（当時）からは前回と同じく女子中高との共有地があるとの理由で校地狭隘を指摘されたわけである。

さらなる発展を考えていた本学では、検討を続けた結果、1982（昭和 57）年の教授会で 3 月から 7 月まで 9 回に渡り協議し、同年 7 月 14 日開催の教授会で「校地問題を正常化するために田辺校地の本格的利用」を決定した。そして 1983（昭和 58）年 2 月 1 日教授会では、田辺校地利用委員会（委員長沖中靖）の答申が承認された。答申には「①将来田辺校地への全学移転統合（1～4 年次の授業）を目指し、その第一段階として 1、2 年次のすべての授業を原則として田辺校地で行う。②学芸学部を改組し、文学部および音楽学部とする。文学部には英文学科のほか、新たに日本文化学科（入学定員 200 名）を設ける。音楽学部は声楽学科（入学定員 25 名）、器楽学科（入学定員 35 名）、理論音楽学科（入学定員 40 名）とし定員増を行う。③短期大学部を設置し、英米語科（入学定員 200 名）と国際教養科（入学定員 200 名）を置く。」とある。実施は 1986（昭和 61）年度からとなって（1983（昭和 58）年 4 月 6 日教授会報告）、利用計画が進められていく。

このように、当初計画は、「1986（昭和 61）年から家政学部を含む全学部 1 年次生の授業を田辺校地で行い、翌年から 1、2 年次生の授業を田辺校地で行う。3、4 年次生の授業は今出川校地で行う」（1 年次、2 年次が順次移転、いわゆる横割り利用）というものであった。ところが、この計画は財政面、ハード面で困難が予想されるとして、「家政学部の 1、2 年次の実験・実習は当分今出川で行う」となった（1983（昭和 58）年 8 月 10 日教授会承認）。さらに、ここに来て、音楽学部についてはハード面、カリキュラムなどソフト面から、1～4 年次同時田辺校地移転する案が浮上し、あわせて英文学科と家政学部の 1 年次生の移転時期は 2 年後ろ倒しされた計画

となった。新しい計画は「①1986(昭和61)年には、まず、音楽学科の1~4年次が田辺校地に移転し定員増(入学定員25名→100名)を行う。②同時に田辺校地に短期大学部(英米語・日本語日本文学科)を設置する。③1988(昭和63)年から英文学科・家政学部1年次生の授業を田辺校地で行う(翌1989(昭和64)年から学部1,2年次生の授業を田辺校地で行う)。また、④学芸学部に新学科日本文化学科の増設を行う。そして、⑤2001(昭和76)年に学部3,4年次生の授業を田辺校地で行い(全学移転)、短期大学部(田辺校地)を今出川校地へ移転する。」であった(1983(昭和58)年12月5日教授会承認)。この時点では再び家政学部の実験・実習棟が1988(昭和63)年に建設される予定になっていた。

しかしながら、1986(昭和61)年に田辺校地が開学した後、英文学科と家政学部の移転計画については、カリキュラム実施面から「1988(昭和63)年度に1,2年次生が同時に移転する」と変更になった(1986(昭和61)年7月2日開催の教授会承認)。さらに、1988(昭和63)年度からの家政学部(家政学科・食物学科)の移転については主に財政面から見送られることとなった(1986(昭和61)年12月23日開催の教授会承認)。ところが、その後、「田辺校地利用小委員会(委員長 小原弘之)の答申を踏まえて1988(昭和63)年には英文学科1,2年次生のみが同時移転し、1990(昭和65)年から3年次生、1991(昭和66)年から4年次生が移転する。家政学部1~4年次生は2001(昭和76)年まで今出川校地を利用する」(同時移転と縦割り利用)こととなった(1987(昭和65)年5月27日開催の教授会承認)。この田辺校地利用に関する「縦割提案」により、当面、田辺・今出川校地で2拠点運営することに変更されたわけである。

この再三再四にわたる計画変更により2001(昭和76)年の家政学部の田辺移転と短期大学部の今出川移転を含む計画はいわゆる「2001年の課題」として残ることになった。なお、英文学科が完全に移転する1991(平成3)年以降の今出川校地利用計画については、1989(平成元)年4月全学的に「今出川校地利用検討委員会」(委員長稲垣定広)で検討され、答申⁹³⁾に従い家政学部の充実を期して建物の整備が一定程度進められた。

一方、「2001年の課題」については、後に1992(平成4)年になって、財政上の問題などから「田辺校地利用に関する2001年部分の計画の白紙撤回」が提案され、9月30日開催の教授会において承認された。これにより

家政学部は、当面、今出川校地で教育・研究を続けることになったが、家政学部の移転時期は示されなかったため、新たな課題となった。以上の経緯から見ると、家政学部の田辺移転計画は十分な財政的裏付けが無く、カリキュラムの検証も無いまま提案されたために、家政学部が振り回されたという感否めない。この課題とも関連してその後2001(平成13)年に提案されたのが「京田辺キャンパス全学統合(案)」である¹⁰⁵⁾。

●家政学部から生活科学部への名称変更の経過

家政学部の改革については1989(平成元)年(玉置日出夫学部長)に「家政学部将来構想検討委員会(委員長 沖中 靖)」が設置され、当面今出川を利用することとなる家政学部の新しいあり方がハード面、ソフト面から検討された。各学科でも検討が繰り返された。同委員会からは、家政学科を消費生活学科と家庭福祉学科の2学科に、また、食物学科を食物学科(食品科学コースおよび調理科学コース)と栄養科学科にそれぞれ発展充実させる4学科制が提案された⁹²⁾。評議会でも9月20日、10月11日と懇談されたが、工業(場)等制限法により今出川校地での新学科設立・定員増は困難である現実と財政面での問題があった。そこで、家政学部としては当面学科名称はそのままとし、教育の目標の方向を明確にすることとなり、1991(平成3)年度より家政学科・食物学科とも新カリキュラムが実施された。また、家政学科には「生活と消費」コースと「児童と福祉」コースが設置された⁹¹⁾。

他方、第二次ベビーブームや大学進学率上昇に対応するための文部省(当時)方針に基づく期間付収容定員(臨時定員)の設定により、本学でも1988(昭和63)年以降入学定員を増加させてきたが、期間付収容定員(臨時定員)の設定は今出川校地で展開する家政学部も例外的に認められたので、家政学部の学生数は増加していった(注:家政学部(生活科学部)の収容定員数が現在のものになるまでの変遷については年表1を参照)。

しかしながら、18歳人口の減少によって1999(平成11)年を終期にした臨時定員の削減時期が近づいていた。また、1991(平成3)年7月に大学設置基準が改正され、基準が大幅に緩和された(大学設置基準の大綱化という)。この急激な状況変化に対応するため、本学では、1992(平成4)年、諸改革および将来構想を検討する「特別委員会(委員長小泉利久教務部長)」が設置され、臨時定員削減後の学部学科体制等が議論となった。同委員会が1992(平成4)年12月21日付で出した答申

では「予想される志願者数の減少および志願動機の変化ないしは多様化により、魅力ある新学科の設立を含む学部・学科の再編成、学科名称変更などが第一に必要と考えられる」として、「1. 英文学科を「英語英文学科」に名称変更する。2. 学芸学部の中に「比較文化学科」（仮称）を 1999（平成 11）年に設立する。3. 家政学部の学部名、学科名を変更すると共に、1 学部、2 学科、4 専攻体制を基本として、改組する」と提言された。また、〈備考〉として「3 については、現行の学部・学科名の時代の流れとの即応、社会科学系の学問分野の必要性、本学の特色を生かしたユニークなカリキュラムの導入などの観点に立ち、2 年後の実施に向けて構想すべきである。」と付記されている⁹⁷⁾。そのうち、「四大の新カリキュラムの実施時期は 1996（平成 8）年度よりとする」となった。（注：答申の 1 については、英文学科は 2 年後の 1994（平成 6）年に英語英文学科と名称変更した。答申の 2. については結局、2000（平成 12）年、現代社会学部社会システム学科が短期大学部を改組転換して設置された。また、2002（平成 14）年学芸学部情報メディア学科が設置された。）

答申の「3. 家政学部の学部名、学科名を変更」を受けて、家政学部では、1992（平成 4）年の教員会議において学部名称変更の是非について話し合った。当初はやはり家政学部という意見もあったが、大方は新学部名に名称変更する方向にまとまり、12 月の教員会議において投票の結果、圧倒的多数をもって改正変更を是とする決議を行った⁹⁸⁾。その後、家政学部内では、両学科懇談会で名称変更、新カリキュラムについての検討がなされ、特に食物学科においては、新カリキュラムの素案も示されたが、最終的な全学部的検討にまでは至らなかった。

また、大学設置基準の大綱化に伴う改革については 1993（平成 5）年 5 月に設置された「同志社女子大学改革委員会（委員長今城淳行教務部長）」で検討され、1994（平成 6）年 3 月 15 日付け報告⁹⁸⁾は「安定した財政基盤にささえられた魅力ある大学」とするためのいくつかの提案がなされた。

家政学部としても「より魅力ある学部学科構成」を目指して、新学部、新学科、新コースについて検討を継続するが、まずは当面、1996（平成 8）年から実施を求められている新カリキュラム改正と学部学科名称の変更（改組転換）を急ぐこととなった。この観点から、坂本武人家政学部長より 1994 年（平成 6）3 月 23 日付けで学部学科名称の素案も示されたが、十分な検討時間がな

く、沖中 靖新家政学部長に引き継がれた。

1994（平成 6）年 4 月、新たに「学部改革委員会」（メンバー：森田潤司（委員長）、岩谷幸春・川崎祐子・紀 嘉子・西野幸典・清水久美子・沖中 靖（家政学部長）・佐々木佳代（家政学科主任）・黒澤祝子（食物学科主任））が設けられ、改めて学部将来構想を検討することになった。委員会ではどう改革するのか、どんな学部にするのか、学科構成はどうするのかについて、さまざまな案が出た。

議論の過程では、学部名候補として生活科学部、生活環境学部、人間生活科学部、人間生活学部、人間生活環境学部が挙がり、学科名候補として、家政学科については、生活環境学科、人間文化・生活学科、人間生活学科、人間環境学科、生活科学科などの候補案が出て、コースやカリキュラムも検討された。食物学科については、食品栄養学科、食品栄養科学科、食物栄養学科、食物栄養科学科などの案が出た。また、資格、とりわけ教員免許ををどうするのが議論され、食物は理系を強めて理科教員免許を取れるような学科にする案も出たが、結論として両学科とも従来の家庭科教員免許を選んだ。このため、食物学科では家政学科とは違い、卒業単位を考えるとカリキュラムに制限がかかるジレンマはこれまで同様残ることになった。

鋭意討議した結果、委員会案としては学部名を生活環境学部、学科名を人間環境学科、食物（品）栄養（科）学科とし、食物（品）栄養（科）学専攻と管理栄養士専攻とした）を置くこととした⁹⁹⁾¹⁰⁰⁾。全国的には、1992（平成 4）年お茶の水女子大が生活科学部に改組したが、1993（平成 5）年奈良女子大が生活環境学部（生活環境学科・人間環境学科）に改組し、武庫川女子大が 1994（平成 6）年に生活環境学部部に改組したように、関西では生活環境という語がトレンドということもあった。

1994（平成 6）年 7 月 16 日の学部教員会議で「生活環境学部への改組転換趣旨（案）」¹⁰⁰⁾が協議されたが、家政学科の先生方の反対が強く侃々諤々の議論となった。この後、本学と文部省（当時）の折衝のなかで、生活環境学部への改組転換で申請すると、設置経費の確保と新カリキュラムにそった教員審査にかかる可能性があるという情報があった。

この情報も考慮しつ 8 月 2 日教員会議でも議論は続いたが、最終的に沖中学部長提案で学部名を生活科学部とすることとなった。学科名は各学科で協議がなされたが、家政学科ではカリキュラムを検討した結果、名称を

人間生活学科として、「生活と消費」コースと「児童と福祉」コースをそのまま置くこととなった¹⁰¹⁾。食物学科では食品より幅広い「食物」、サイエンスを強調する「科学」を入れ、名称を食物栄養科学科とすることになった。次いで8月25日の教員会議で「名称変更する趣旨及び理由」の概略が承認された。この家政学部の意向を踏まえた教務部提案が、10月5日に評議会に提案され了承された。10月12日教授会で承認後、名称変更を文部省（当時）に申請し¹⁰²⁾、1995（平成7）年2月15日に無事承認された。すんなりと話が進んだのは当時文部省の大学設置審議会家政学専門委員会のメンバーに黒澤先生が入っておられて適切な情報が得られたこともあったと考える。実は、全国で食物栄養科学科と名乗っているのは現時点で本学のみである。

文部省（当時）に申請した「名称変更する趣旨及び理由」（資料1）には、「家政学部発足当時においては、人間生活の基本単位は『家』にあり、（中略）大きく変化しつつある生活スタイルに対応して、人間生活のあり方を単に家庭という枠組みの中でのみとらえるのではなく、広く人間生活全般にかかわる諸事象に関してさまざまな角度からアプローチすることにより、現代の科学技術文明のもとに生きる人間と、その生活のあり方を科学的に分析し、解明する必要性が強く要請されている。（中略）家庭生活のみに限定されず、地域・社会生活にも密着した学問領域として、生活のあり方を総合的、科学的に研究・教育する方向を目指した現行の教育内容と、教員の研究分野を明確に示す学部名としては、『生活科学部』が最も適切である。」（一部抜粋）¹⁰²⁾とある。両学科の趣旨と理由については資料1⁹²⁾を参照されたい。

全国で家政学部があった大学のうち、これまでに20校が家政学部から他の学部に変更した。現在も家政学部を名乗っているのは、日本女子大学の他16校で、京都では京都女子大学がある。

●生活科学部としての発展

こうして1995（平成7）年4月に生活科学部と名称変更され、この年の入学生から生活科学部学生となった。学科名も家政学科は人間生活学科に、食物学科は食物栄養科学科に、専攻名も食物学専攻は食物科学専攻に名称変更された³¹⁾³⁶⁾³⁷⁾¹⁰²⁾。

大学院家政学研究科の名称も1999（平成11）年4月から生活科学研究科食物栄養科学専攻に変更された。生活科学研究科食物栄養科学専攻には、その後2001（平成13）年4月、食物栄養科学コースと臨床栄養学コー

スが設置された。臨床栄養学コースは医師等と協力して適切な栄養指導が行える高度な職業人としての管理栄養士を育成することを目的として全国に先駆けて設置されたものである。

さて、生活科学部となった後も、受験生動向など時代のニーズに応えるため改革は続いた。簡単に見てみると、1996年（平成8）4月から自由学芸教育研究センター所属教員のうち4名が生活科学部へ所属変更（人間生活学科3名（宮澤正典教授・野崎康明教授・高原まり子教授）・食物栄養科学科1名（森 淑子教授））になり、生活科学部は新しい仲間を迎えた^{注2}（後に短期大学部から現代社会部への改組転換に伴って2000（平成12）年度から米田祐子准教授が食物栄養科学科に加わった。）。

1998（平成10）年4月より食物栄養科学科食物科学専攻の入学定員20名を管理栄養士専攻へ移し、管理栄養士専攻の入学定員が60名から80名に増員された⁴²⁾。この変更は、志願者の資格志向もあり、現在までの両専攻志願者の安定的確保につながっている。

2000（平成12）年度から人間生活学科では2コース制が廃止され、「子どもと健康・福祉」、「生活と文化」、「生活と経済・環境」の3科目群制が採用された。その後もカリキュラムを「ひと」「くらし」「環境」の3分野で示すなど教員構成の変化にあわせてわかりやすい提示を心がけている。

両学科では資格取得関係でも充実が図られてきた。たとえば、1997（平成15）年から食物科学専攻でも食品衛生管理者と食品衛生監視員の任用資格が取れるようになった。また、2004（平成16）年4月から食物科学専攻にはフードスペシャリスト課程が設置された。2005（平成17）年4月からは管理栄養士専攻で栄養教諭一種免許がとれるようになった。これによりすべての学科・専攻で教員免許が取れるようになった。現在、人間生活学科と食物科学専攻で取得可能な資格は、中学校・高等学校教員一種免許（家庭）、博物館学芸員、図書館司書、学校図書館司書教諭、日本語教員、社会福祉主事（任用資格）、ピアヘルパーである。管理栄養士課程で取得可能な資格は、栄養士、管理栄養士（国家試験受験資格）、栄養教諭一種免許、食品衛生管理者（任用資格）と食品衛生監視員（任用資格）である。なお、2006（平

注2 自由学芸教育研究センターは、大学設置基準の大綱化により一般教育と専門教育の区分が廃止されたことで設置された旧一般教育所属の教員を中心にした組織であったが、1996年（平成8）年3月31日に廃止された。

成 18) 年の栄養士法改正で管理栄養士養成校卒業生も全科目受験になったことを機に、学部「国家試験対策室」を設けるなど対応を充実させ、高合格率を維持している。

再び大学院について触れると、長らく人間生活学科(旧家政学科)につながる大学院はなかったが、2008(平成 20)年 4 月 1 日、ようやく大学院生活科学研究科に生活デザイン専攻(修士課程)が設置され、同研究科は食物科学専攻と合わせて 2 専攻となった。将来、両専攻に博士課程が設置されることを期待したい。

●校地問題と生活科学部

校地問題についても触れておく。家政学部(生活科学部)をめぐる課題として、「いわゆる 2001 年の課題」(2001 年家政学部の田辺(京田辺)移転と短期大学部の今出川移転計画)(1987(昭和 62)年 5 月 27 日の教授会承認)があったが、すでに述べたように、1992(平成 4)年 9 月 30 日の教授会において、この計画は財政上の問題などから、2001 年部分の計画が白紙撤回された。その後は「同志社女子大学の将来構想についての提案」¹⁰³⁾などで校地利用の検討が続いたが、本格的検討はなされなかった。一方、2000(平成 12)年 4 月短期大学部が 4 年制の現代社会学部社会システム学科に改組・転換したことで 2001 年計画の前提であった短期大学部がなくなってしまった。この前提変更と今出川校地諸施設の老朽化問題を受けて、2001(平成 13)年 7 月開催の教授会に、新たに、「同志社女子大学構想(案)－京田辺キャンパス全学統合について－」が提案され、今出川キャンパスを有効利用する前提で生活科学部を京田辺キャンパスへ移転し全学統合することが審議された。しかしながら、全学移転のメリット・デメリットの議論とともに、全学移転後の今出川校地利用の明確な具体案がないことがネックとなり、2 回の審議の後、継続審議となった。

この間、2002(平成 14)年 7 月に工業(場)等制限法による規制が解除され、田辺・今出川両校地を 1 キャンパスと見なすことが可能となり、今出川校地における学生数増も可能となるなど状況が変わった。これを受けて 2002(平成 14)年 7 月には同志社女子大学企画部『将来構想のための参考資料』¹⁰⁴⁾が配布されて校地問題の再議論が喚起された。

また、継続審議の間に、大学審議会答申(1997(平成 9)年 1 月 29 日)「平成 12 年度以降の高等教育の将来構想について」を受けた文部省方針が出たことから、期間

付き入学定員(臨時定員)を設定していた両学科では、2004(平成 16)年 4 月 1 日から期間付き入学定員(臨時定員)の恒常化が行われた。

間において、2004(平成 16)年 12 月 15 日開催の教授会で「キャンパス利用計画について」¹⁰⁶⁾¹⁰⁷⁾が提案され了承された。決定事項は「①同志社女子大学構想(案)－京田辺キャンパス全学統合について－」の提案を取り下げる。②2009(平成 21)年 4 月 1 日をもって 1,500 名を上限として収容定員を京田辺キャンパスから今出川キャンパスに移す。③京田辺キャンパスから今出川キャンパスに移す学科は、英語英文学科、日本語日本文学科とする」であった。この決定により、以後両校地の学生数を均衡させ、2 校地で教育・研究活動を展開することになり、生活科学部は英語英文学科および日本語日本文学科とともに引き続き今出川校地で教育・研究活動を行うこととなった。2009(平成 21)年に純正館が建て直され、同年 4 月 1 日、英語英文学科と日本語日本文学科からなる表象文化学部が開設され、1～4 年次生約 1500 名が今出川キャンパスで授業を開始した。今出川キャンパスは表象文化学部、生活科学部の 2 学部体制となり学生数が増加したことでキャンパスに賑やかさが戻ってきた。

昨年 2015(平成 27)年 9 月には新・新心館が竣工し、食物栄養科学科関係の研究室、実験室、実習室が集結し、新しい出発をした。来年 2017(平成 29)年からは人間生活学科の研究室、実験室、実習室も新・楽真館へ移転する予定になっている。

近年、思い出深い純正館、新心館、楽真館が建て直され、頌美館 3 階ホールは無くなり、心和館 3 階 301 教室も近く無くなるなど今出川校地の建物・教室の変遷が著しく、キャンパス風景も様変わりしてきている。一新なった建物・教室をいかに生かしていくか、これから真価が問われるところである。

●同志社女子大学生生活科学会の活動

1967(昭和 42)年の家政学部設置とともに発足した同志社女子大家政学会は、これまで学部・学科と協力してさまざまな事業を行ってきた。家政学部が生活科学部と名称変更し、完成年度を迎えた 1998 年(平成 10)年 4 月から、同会は同志社女子大学生生活科学会と名称変更した。また、学会誌『同志社家政』も同年から『同志社女子大学生生活科学』に名称変更されて、現在に至っている。

同志社女子大学生生活科学会 2016(平成 28)年度大会

は前身の同志社女子大学家政学会創立大会から数えて第50回目の記念すべき大会となった。2017（平成29）年には学会創立50周年を迎えることになる。

現会則には「本会は生活科学に関する研究および会員相互の親睦を主な目的とする」とあり、事業として「(1) 毎年1回大会開催, (2) 研究会および講演会の開催, (3) 会誌の発行, (4) 奨学金の給付, (5) その他」を行っている。初期の頃の研究会には「食生活研究会」, 「同志社生活学校」, 「家庭生活研究会」などがあり, 多彩なものであったようである⁶¹⁾。現在では, 「(5) その他」の事業については, 見学会の開催, 年一回の『同志社女子大学通信』の発行が行われている。会員名簿の発行は1969（昭和44）年以来1985（昭和60）年まで4回発行されている¹⁸⁾。名簿は会員の把握・連絡に重要なものであるが, 経費の問題や個人情報保護法の関係もあり, その後は発行されていない。

学会の諸活動については, 深田尚彦氏が1987（昭和62）年, 『しばぐさ 学報第26号』に「同志社女子大学家政学会のこと」としてまとめている¹⁸⁾。本稿ではその後の活動を追加し, 歴代の学会長名, 大会と大会講演, 家政学だより, 学会通信, 会誌, 見学会, 研究会などの事業を年表2にまとめた。学部主催の公開講演会・公開講座も年表3にまとめた。

●これからの生活科学部と同志社女子大学生生活科学会

本学の家政学部から生活科学部への名称変更した事情には, 外的要因と内的要因があったが, さまざまな教育・研究分野の本学家政学部教員がさんざん議論して出した結論であった。現在, 社会や受験生に生活科学部を説明することに, それほど苦しむこともない状況をみれ

ば, 紆余曲折はあったものの名称変更は当時において最善の選択であったといえるのではなかろうか。25年前の「家政学通信」に, 「順不同・ずばり一言! 10年後の家政学を考える」²⁴⁾という企画記事があり, 当時の教職員が家政学部の将来を語っている。いずれも生活科学部となった今も, 当たらずとも遠からずのコメントが多い。

現在, 生活科学部では名称変更当時以降, 教職員メンバーもかなり入れ変わってきた。20周年を迎えるにあたって, 学部・学科名称変更の経過や趣旨を踏まえた上で, 現状に甘えることなく, 引き続き, 生活科学とは, 人間生活学科とは, 食物栄養科学科とは何か, を問い続けなければならない。

実は宿題がひとつある, 2005（平成13）年4月20日の教授会で「生涯学習社会の構築に寄与する」ため, 「2007（平成14）年4月に生活科学部人間生活学科に通信教育課程を設置」することが承認されたが⁹⁸⁾, 費用対効果, 先生方の負担の問題, 事務体制（実施体制）の課題などがあり, これまで実現に至っていない。当初計画通りにはいかないであろうが, その後の情報技術の発達, 学習ソフトの開発技術の進展もあることから, 人間生活学科に限ることなく全学的に新しい発想での展開を継続して検討してよいのではないだろうか。

生活科学部両学科は, それぞれ規模が拡大してともすれば離れがちになりそうである。生活科学会は生活科学部2学科のつなぎ役として今後ますます重要な役目を担うことになるであろう。教職員, 在学生, 卒業生が忌憚らない意見を交わしあい, 力をあわせて, 学部・学科そして学会を発展させていきたいものである。

生活科学部 20 周年・生活科学会第 50 回記念大会によせて

年表 1 生活科学部のあゆみおよび今出川校地施設の移り変わり⁹⁾⁴⁷⁾¹⁰⁸⁾

1975(明治 8)年11月29日	同志社英学校開設(社長新島 襄)
1876(明治 9)年10月24日	京都御苑内のディヴィス邸(旧柳原前光邸)で A. J. スタークウェーザーらが女子塾(京都ホーム)を始める
1877(明治10)年 4 月21日	京都御苑内のディヴィス邸(旧柳原前光邸)に同志社分校女紅場を開設(校長新島 襄)
9 月21日	同志社女学校と改称
1878(明治11)年 9 月16日	上京第 11 区今出川通り(常磐井殿町二条家の地所)(現在のキャンパス)に校舎を新築・移転し授業開始
1887(明治20)年 8 月	同志社女学校本科の上に高等科を設置(予備科 3 年, 本科 4 年, 高等科 3 年)
1892(明治26)年 6 月	本科を普通科に, 高等科を専門科(師範科, 文学科, 神学科を設置)に改める
1901(明治34)年 4 月	同志社女学校予備科を廃し, 普通科を高等普通科と改め, 新たに専門科を設置(同年 3 月 22 日女学校学則改正承認)
1904(明治37)年 4 月	課程を改正し同志社女学校専門科を高等科に改称し, 文科(3 年)・家政科(2 年)を置く(同年 3 月承認)(注: 先行書 ⁹⁾⁴⁷⁾⁷¹⁾⁹⁵⁾⁹⁸⁾ では, 改称時が 1903(明治 36)年か 1904(明治 37)年か, また女学校時代の名称が普通科・普通部・普通学部・高等普通学部, 専門科・専門学部, 高等科・高等部・高等学部かについて記述が混乱している。ここでは 1904(明治 37)年普通科, 専門科とする ^{105)108)。})
1905(明治38)年 4 月	同志社女学校高等科に家政科を設置 ⁹⁾⁴⁷⁾¹⁰⁵⁾¹⁰⁸⁾ 。(注: 先行書 ⁹⁾⁷¹⁾ によると 1906(明治 39)年 8 月の同志社女学校規則では, 高等学部文科(3 年), 家政科(3 年)としている。)
1912(明治45)年 4 月	専門学校令による同志社女学校専門学部(英文科と家政科)を設置(同年 2 月 14 日認可) ⁴⁷⁾
1913(大正 2)年 8 月20日	ジェームズ館竣工
1915(大正 4)年12月	専門学部家政科教室家政館落成(注: ジェームズ夫人の寄贈)
1924(大正13)年 4 月 1 日	専門学部家政科卒業生には「家事」の「中学校教員無試験取扱校」に認定される
1927(昭和 2)年10月22日	専門学部家政館改築工事竣工(後の楽真館の場所)
1930(昭和 5)年 6 月 3 日	同志社女子学校専門学部を同志社女子専門学校と改称する件, 文部省より認可(注: 学制改革により 1949(昭和 24)年 3 月発展的に解消)
1932(昭和 7)年 2 月11日	栄光館竣工式(ファウラー講堂。名称はデントンの知人 E. ファウラーに因む)
1939(昭和13)年 5 月16日	同志社女子専門学校 家政学会発足 ⁴¹⁾⁴⁷⁾
1944(昭和19)年 4 月	同志社女子専門学校新制度発足。家政科は「家政科育児科」および「家政科保健科」に改組
1947(昭和22)年10月	同志社女子専門学校家政科保健科を家政科生活科と改称
1949(昭和24)年 4 月 1 日	学制改革により, 同志社女子専門学校を改組して, 同志社女子大学を設置(学長・E. L. ヒバード)
	学芸学部 英文学専攻 入学定員 100 名
	音楽専攻 入学定員 20 名
	食物学専攻 入学定員 60 名
	(同年 2 月 21 日設置認可)

- 1951(昭和26)年9月1日 厚生大臣から学芸学部食物学専攻を栄養士養成施設として指定、卒業生に対して栄養士無試験検定の資格を厚生大臣より認可(同年9月1日指定)
- 1952(昭和27)年4月1日 学芸学部中の食物学専攻を**家政学専攻**と名称変更(同年2月20日変更承認)
- 1954(昭和29)年10月26日 学芸学部家政学専攻に教育職員免許授与認定(中学校、高等学校「家庭、保健」)
- 1955(昭和30)年12月8日 デントン館竣工・献堂式
- 1959(昭和34)年4月1日 学芸学部に3専攻設置、収容定員変更
学芸学部 英文学専攻 入学定員 150名(旧 100名)
家政学専攻 入学定員 90名(旧 60名)
(同年3月20日変更承認)
- 1960(昭和35)年10月1日 新心寮竣工(後に新心館と改称)(現在の新・新心館北側部分の場所)
- 1961(昭和36)年4月 家政東館(木造モルタル塗り2回建)竣工(現在の心和館の場所)
- 1962(昭和37)年1月22日 体育館竣工。「純正館」と命名(現在の新・純正館の場所)
- 1963(昭和38)年1月3日 家政館が漏電のため全焼
- 1964(昭和39)年4月7日 新・家政館第一期工事竣工。楽真館と命名(1966(昭和41)年1月10日第二期工事竣工)
(2016(平成28)年新・楽真館建築のために取り壊し)
- 1965(昭和40)年4月1日 学芸学部学科増設並びに収容定員変更
学芸学部 英文学専攻(入学定員 150名)→英文学科(入学定員 250名)
音楽専攻(入学定員 20名)→音楽学科(入学定員 25名)
家政学専攻(入学定員 90名)→**家政学科**(入学定員 150名)
(同年1月19日変更承認)
- 1966(昭和41)年1月10日 楽真館第二期工事竣工
4月1日 栄養士養成施設定員変更
家政学科食物栄養課程 80名を 100名に増員(同年2月26日変更承認)
- 1967(昭和42)年3月1日 同志社女子大学家政学会発会(注:1998(平成10)年に同志社女子大学活科学会と改称)³⁷⁾³⁹⁾⁶¹⁾
4月1日 学芸学部家政学科を発展的に解消し、**家政学部**を新設。2学科設置(同年1月23日設置認可)。これにより家政学科食物栄養課程は食物学科に変更(同年1月23日変更承認)
家政学部 **家政学科**(入学定員 50名)
食物学科(入学定員 100名)
9月12日 頌啓館(現頌美館)竣工(アメリカン・ボードより 1,500万円寄附)
- 1968(昭和43)年2月28日 『同志社家政』創刊(家政学会発行)。(注:1998(平成10)年第32号より『同志社女子大学生活科学』生活科学会発行と改称)
4月1日 大学院**家政学研究科食物学専攻**(修士課程)設置。入学定員 8名(同年3月30日設置認可)
9月12日 『家政学だより』創刊(注:1973(昭和48)年13号で終刊)
- 1969(昭和44)年4月1日 家政学部食物学科に**食物学専攻**と**管理栄養士専攻**を設置
家政学部 家政学科 入学定員 50名
食物学科食物専攻 入学定員 40名
食物学科管理栄養士専攻 入学定員 60名
(同年1月6日設置認可)

生活科学部 20 周年・生活科学会第 50 回記念大会によせて

- 1971(昭和46)年 3 月 4 日 新和館第 1 期工事竣工。学生食堂をデントン館から移転
- 1973(昭和48)年 3 月24日 家政学部食物学科管理栄養士課程に食品衛生管理者および食品衛生監視員養成施設指定認可
- 1976(昭和51)年 4 月 1 日 家政学部収容定員変更 (恒常定員増)
 家政学部 家政学科 入学定員 60 名 (旧 50 名)
 食物学科 入学定員 120 名 (旧 100 名)
 食物学専攻 入学定員 60 名 (旧 40 名)
 管理栄養士専攻 入学定員 60 名 (変更なし)
 (同年 2 月 12 日変更認可)
- 1977(昭和52)年 6 月 『同志社女子大学家政学会通信』創刊 (注: 1999 (平成 11) 年より『同志社女子大学生生活科学会通信』と改称)
- 9 月 6 日 図書館竣工・献堂式
- 1978(昭和53)年 8 月 新和館第 2 期工事 (増床工事) 竣工。家政東館およびデントン館から研究室を移転
- 1983(昭和58)年 2 月 1 日 教授会 田辺校地利用委員会 (沖中 靖委員長) 答申 (1-2 年次の授業を田辺で行う。短期大学部を設置する等) を了承
- 1987(昭和62)年 5 月27日 教授会 田辺キャンパス利用に関する「縦割提案」を承認 (当面の間、学芸学部と短期大学部は田辺校地を利用、家政学部は今出川校地を利用する 1988 年度から学芸学部のみ田辺校地へ 1, 2 年次同時移転する。)
- 1988(昭和63)年 4 月 1 日 家政学部家政学科および食物学科食物学専攻収容定員変更 (期間付定員増 1988 (昭和 63) 年度～1996 (平成 8) 年度)
 家政学部 家政学科 入学定員 80 名 (うち期間付定員 20 名)
 食物学科 入学定員 140 名 (うち期間付定員 20 名)
 食物学専攻 入学定員 80 名 (うち期間付定員 20 名)
 管理栄養士専攻 入学定員 60 名 (変更なし)
 (1987 (昭和 62) 年 12 月 23 日変更認可)
- 1991(昭和66)年 4 月 1 日 家政学部家政学科および食物学科食物学専攻収容定員変更 (期間付定員増 1991 (平成 3) 年度～1999 (平成 11) 年度) 認可
 家政学部 家政学科 入学定員 100 名 (旧 80 名) (うち期間付定員 40 名) (20 名増)
 食物学科 入学定員 150 名 (旧 140 名) (うち期間付定員 30 名) (10 名増)
 食物学専攻 入学定員 90 名 (旧 80 名) (うち期間付定員 30 名) (10 名増)
 管理栄養士専攻 入学定員 60 名 (変更なし)
 (1990 (平成 2) 年 12 月 21 日変更認可)
- 1995(平成 7)年 4 月 1 日 家政学部の学部学科名称を変更³¹⁾³⁶⁾³⁷⁾
 家政学部を生活科学部に 入学定員 250 名 (うち 70 名は期間付入学定員)
 家政学科を人間生活学科に 入学定員 100 名 (うち期間付入学定員 40 名)
 食物学科を食物栄養科学科に 入学定員 150 名 (うち期間付入学定員 30 名)
 食物学専攻を食物科学専攻に 入学定員 90 名 (うち期間付入学定員 30 名)
 (管理栄養士専攻は名称変更を行わない 入学定員 60 名)

(同年2月15日名称変更承認)

- 4月1日 大学院家政学研究科食物学専攻の名称を生活科学研究科食物栄養科学専攻と変更
- 1996(平成8)年3月31日 自由学芸教育研究センター(旧一般教育)廃止、同センター所属教員のうち4名が生活科学部へ所属変更
- 1997(平成9)年3月18日 食物栄養科学科食物科学専攻に食品衛生管理者・食品衛生監視員養成施設指定認可
- 4月1日 生活科学部人間生活学科および生活科学部食物栄養科学科食物科学専攻期間付入学定員延長(1997(平成9)年度～1999(平成11)年度)(注:1996(平成8)年度で切れる人間生活学科 期間付入学定員20名、食物栄養科学科入学定員期間付入学定員20名の延長)
- 生活科学部 人間生活学科 入学定員100名(うち期間付入学定員40名)
- 食物栄養科学科 入学定員150名(うち期間付入学定員30名)
- 食物科学専攻 入学定員90名(うち期間付入学定員30名)
- 管理栄養士専攻 入学定員60名(期限付定員なし)
- (1996(平成8)年12月19日承認)
- 1998(平成10)年4月1日 食物栄養科学科食物科学専攻および管理栄養士専攻収容定員変更
- 生活科学部 食物栄養科学科 入学定員150名(うち期間付入学定員30名)
- 食物科学専攻 入学定員70名(旧40名)(うち期間付入学定員30名)
- 管理栄養士専攻 入学定員80名(旧60名)(期限付入学定員なし)
- (1997(平成9)年12月19日変更承認)
- 4月1日 今出川購買・食堂に同志社生協導入
- 1998(平成10)年4月1日 同志社女子大学家政学会から同志社女子大学生生活科学会へ名称変更
- 学会誌『同志社家政』を『同志社女子大学生生活科学』へ名称変更
- 1999(平成11)年4月1日 大学院家政学研究科食物学専攻を生活科学研究科食物栄養科学専攻に名称変更(1998(平成10)年12月21日変更承認)
- 2000(平成12)年4月1日 1999(平成11)年度を終期とする期間を付した入学定員(臨時的定員)を2004(平成16)年度まで延長(期間を付した入学定員(臨時的定員)の設定に係る学則変更が1999(平成11)年10月22日に認可)

期間を付した入学定員 ()内は入学定員

学部・学科・専攻名		2000 (平成12) 年度	2001 (平成13) 年度	2002 (平成14) 年度	2003 (平成15) 年度	2004 (平成16) 年度
学芸学部	英語英文学科	45 (295)	40 (290)	35 (285)	30 (280)	25 (275)
	日本語日本文学科	27 (187)	24 (184)	21 (181)	18 (178)	15 (175)
	音楽学科	演奏専攻	28 (85)	25 (82)	21 (78)	18 (75)
		音楽文化専攻	12 (45)	10 (43)	9 (42)	7 (40)
生活科学部	人間生活学科	36 (96)	32 (92)	28 (88)	24 (84)	20 (80)
	食物栄養科学科食物科学専攻	27 (67)	24 (64)	21 (61)	18 (58)	15 (55)

- 4月1日 教員の免許状授与の所要資格を得させるための大学の課程として認定
- 生活科学部人間生活学科 中学校・高等学校教諭一種免許状(家庭)
- 生活科学部食物栄養科学科食物科学専攻 中学校・高等学校教諭一種免許状(家庭)

生活科学部 20 周年・生活科学会第 50 回記念大会によせて

(同年 3 月 27 日認定)

- 2001(平成13)年 4 月 1 日 大学院生活科学研究科食物栄養科学専攻に食物栄養科学コースと臨床栄養学コースを設置
8 月31日 ジェームズ館 (1913 (大正 2) 年建築) の復元的修復工事終了・奉献式 (栄光館とあわせて登録有形文化財となった)
- 2004(平成16)年 4 月 1 日 生活科学部収容定員の増加 (注: 1999 (平成 11) 年申請の期間を付した入学定員 (臨時的定員) 延長計画にある 2004 年度定員の恒常化)
生活科学部 人間生活学科 入学定員 80 名 (旧 60 名)
食物栄養科学科 食物科学専攻 入学定員 50 名 (旧 40 名)
管理栄養士専攻 入学定員 80 名 (変更なし)
(2003 (平成 15) 年 7 月 24 日 大学収容定員の増加に係る学則変更認可)
- 2004(平成16)年 4 月 1 日 食物科学専攻が「フードスペシャリスト養成機関」として認定
- 2005(平成17)年 4 月 1 日 教員の免許状授与の所要資格を得させるための大学の課程として認定
生活科学部食物栄養科学科管理栄養士専攻 栄養教諭一種免許状 (同年 3 月 30 日認定)
- 2008(平成20)年 4 月 1 日 大学院 生活科学研究科に生活デザイン専攻 (修士課程) (入学定員 5 名) を設置。食物科学専攻と合わせて 2 専攻となる
- 2015(平成27)年 9 月17日 旧・新心館跡に、新・新心館竣工・献堂式。食物栄養科学科の研究室および実験・実習室などがデントン館、楽真館、心和館から移転。

※2000 (平成 12) 年頃までの今出川校地の主な建物・施設の変遷については、玉置日出夫氏 (1999 (平成 11) 年)^{44a) 44b)}、房岡昭一氏 (1993 (平成 5) 年)²⁷⁾、宮澤正典氏 (2004 (平成 16) 年)⁵⁸⁾が書かれたものでも知ることができる。

年表 2 生活科学会のあゆみ

年度	会長	家政学だより	学会通信	学会誌	学会大会	
					日時	講師
1967(昭和42)	別所 秀子			第1号('68 2月28日) 50頁	発会式(3月1日) 第1回(7月9日)	武田薬品工業株式会社 米田 雅彦 研究開発本部醃酵生物 研究所 本学家政学部食物学科 永井 秀夫 教授
1968(昭和43)	林 淳一	見本号 (9月12日) 1号(11月16日) 2号(11月30日) 3号(1月27日)		第2号('69 2月15日) 52頁	第2回(11月30日)	児童文学者 上野 瞭 本学家政学部食物学科 大塚 肇 教授
1969(昭和44)	林 淳一	4号(6月14日)		第3号('70 3月1日)42 頁	第3回(6月14日)	食物史研究者・大阪教 篠田 統 育大学名誉教授 本学家政学部食物学科 小原 弘之 講師
1970(昭和45)	唐澤 郁夫	5号(12月15日)		第4号('71 3月1日)49 頁	第4回(6月20日)	京都大学農学部教授・ 小野寺 幸之 本学大学院講師 進
1971(昭和46)	唐澤 郁夫	6号(12月15日)		第5号('72 3月1日)63 頁	第5回(6月19日)	京都大学農学部教授 田中 正武
1972(昭和47)	小山 松治郎			第6号('73 3月1日)77 頁	第6回(6月17日)	京都新聞社計画部長 大野 明
1973(昭和48)	小山 松治郎	7号(6月16日)		第7号('74 3月1日)64 頁	第7回(6月16日)	本学家政学部食物学科 別所 秀子 教授 本学家政学部家政学科 久次米 哲子 教授
1974(昭和49)	大塚 肇	8号(6月22日)		第8号('75 3月1日)59 頁	第8回(6月22日)	本学家政学部食物学科 井上 哲夫 教授
1975(昭和50)	大塚 肇	9号(6月21日)		第9号('76 3月1日)63 頁	第9回(6月21日)	兵庫女子短期大学北須 守屋 光雄 磨保育センター所長
1976(昭和51)	唐澤 郁夫	10号(6月12日)		第10号('77 3月1日)44 頁	第10回(6月19日)	日本産業皮膚衛生協会 河合 享三 河合皮膚科医院院長
1977(昭和52)	唐澤 郁夫	11号(6月11日)	No.1(6月)(はがき判)	第11号('77 12月20日) 56頁	第11回(6月18日)	武田薬品工業食品研究 安松 克治 所所長
1978(昭和53)	玉置 日出夫	12号(6月3日)	No.2(6月)(はがき判) No.3(11月)(B5判-4頁)	第12号('78 12月20日) 71頁	第12回(6月10日)	株式会社ワコール顧問 玉川 長一郎
1979(昭和54)	玉置 日出夫 (運営委員長 瀬古 一光)	13号(6月6日)	No.4(5月)(はがき判) No.5(11月)(B5判-4頁)	第13号('79 12月20日) 74頁	第13回(6月9日)	大丸消費科学研究所所 下村 壽 長
1980(昭和55)	木咲 弘 (運営委員長 大塚 肇)		No.6(5月)(はがき判) No.7(12月)(B5判-4頁)	第14号('80 12月20日) 69頁	第14回(6月14日)	京都大学食糧科学研究 松下 雪郎 所教授
1981(昭和56)	木咲 弘 (運営委員長 林 淳一)		No.8(5月)(はがき判) No.9(11月)(B5判-4頁)	第15号('81 12月20日) 60頁	第15回(6月13日)	童話作家 今江 祥智
1982(昭和57)	安藤 孝雄 (運営委員長 林 淳一)		No.10(5月)(はがき判) No.11(11月)(B5判-4頁)	第16号('82 年12月20日) 59頁	第16回(6月19日)	本学家政学部食物学科 岩崎 良文 教授
1983(昭和58)	安藤 孝雄 (運営委員長 大塚 肇)		No.12(6月)(はがき判) No.13(11月)(B5判-4頁)	第17号('83 年12月20日) 46頁	第17回(6月25日)	本学家政学部食物学科 森田 潤司 専任講師
1984(昭和59)	木咲 弘 (運営委員長 瀬古 一光)		No.14(5月)(はがき判) No.15(11月)(B5判-4頁)	第18号('84 年12月20日) 68頁	第18回(6月2日)	京都青果合同株式会社 内田 昌一 取締役社長

生活科学部 20 周年・生活科学会第 50 回記念大会によせて

学会大会		見学会	研究会	
講演題目	その他		テーマ	講師
「イノシン酸をめぐる諸問題」				
「感染に対して強い弱いということー感染に対する非特異的防御機構概説ー」				
「サン・テグジュペリの『星の王子さま』について」	お茶の会	京都大学木材研究所西本研究室 「シロアリ」および宝酒造株式会社 社みりん工場（1969 年 2 月 20 日）	第 1 回同志社家政懇談会（12 月 14 日）林淳一「家政学とは何か」	
「界面活性物質について」			第 2 回同志社家政懇談会（1969 年 1 月 18 日）坂本武人「家庭経済の変化とこれからの消費生活」 食品生活研究会（調理研究グループ会）（1969 年 2 月 15 日、3 月 15 日）	
「すしの進化」	お茶の会		食品生活研究会（調理研究グループ会）（4 月 19 日、5 月 17 日）	
「松茸の社会」				
「アメリカ学会旅行印象記」	茶話会	日本新薬山科植物研究所および京都草木染研究所（11 月 14 日）		
「アンデスに栽培植物の起源を求めて」	茶話会	明治製菓高槻工場およびアサヒビール吹田工場（7 月 8 日）	缶詰研修会「缶詰の開缶試験」（12 月 21 日）	日本缶詰協会専務理事 隅野 勇 事
「広告と消費者ーマスコミからみた消費者ー」		東洋レーヨン滋賀工場研究所 三洋電気洗濯機事業部滋賀工場		
「同志社女子大学の家政学会発足前後に思う」	茶話会	川島織物 KK 工場（6 月 30 日）		
「家政学の歴史とその行く手」				
「肥満の治療」	映画「京菓子」	京都市衛生研究所（7 月 11 日） 草木染研究所（12 月 14 日）		
「子どもの発達と教育ー★遊ばよく遊べのすすめー」	スライド「中学生の性教育」	京都市上水局蹴上浄水場 水質試験場（7 月 9 日）		
「最近の化粧品、衣料による皮膚障害を考える」		鶴屋吉信および塩芳軒（7 月 9 日）		
「食品のイメージー購買動機と嗜好調査からみた食品のイメージー」		大阪ガス泉北製造所（7 月 9 日）		
「女性美とアパレル産業」	映画「野菜は安全かー見直せ食品添加物」	川島織物テキスタイルスクール（7 月 8 日）		
「商品の消費性能」	映画「冷凍食品」	日本新薬試験農場（山科）（10 月 13 日）	和紙研究会「講演と実演」（1980 年 2 月 16 日）	京都工芸繊維大学名 町田 誠之 誉教授 本学音楽学科職員 阪田 美枝
「油のいたみ」		京都市衛生研究所および京都市公害センター（7 月 9 日）	調理研究会「焼菓子と冷たいデザート」（1981 年 1 月 10 日）	元本学家政学部 越賀 玲子
「夢みる理由」		キリンビール株式会社 京都工場（7 月 8 日）	チョコレートと和菓子に関する映画会（12 月 12 日）	
「臨床栄養学の最近の進歩ー食物繊維 Guar Jelly を中心としてー」		京都友禅会館（7 月 8 日）	包丁一本文化論（料理の話と実演・試食）（12 月 4 日）	料理屋「梁山泊」 橋本 憲一
「酸素毒性の化学ー活性酸素による遺伝子破壊ー」		泉屋博古館（11 月 12 日）（中止）	顔料樹脂捺染実習（1 月 21 日）	本学家政学部教授 瀬古 一光
「最近の食糧問題とこれからの食生活」		キリンビール株式会社 京都工場（7 月 7 日）	顔料樹脂捺染実習「あなたが染める T シャツ教室」（7 月 9 日・10 日）	本学家政学部教授 瀬古 一光

同志社女子大学生生活科学 Vol. 50 (2016)

年度	会長	家政学だより	学会通信	学会誌	学会大会	
					日時	講師
1985(昭和 60)	木咲 弘 (運営委員長 坂本 武人)		No.16(5月)(B5判-4頁) No.17(12月)(B5判-4頁)	第19号('85年12月20日) 94頁	第19回(6月8日)	俳優・レック外語学院 二谷 英明 院長
1986(昭和 61)	沖中 靖 (運営委員長 深田 尚彦)		No.18(5月)(B5判-4頁) No.19(12月)(B5判-4頁)	第20号('89年2月20日) 86頁	第20回(6月7日)	同志社大学工学部教授 西岡 一
1987(昭和 62)	沖中 靖 (運営委員長 林 淳一)		No.20(5月)(B5判-4頁) No.21(12月)(B5判-4頁)	第21号('88年2月20日) 91頁	第21回(1987)	精華大学教員 梶田 勳
1988(昭和 63)	木咲 弘 (運営委員長 小原 弘之)		No.22(5月)(B5判-4頁) No.23(11月)(B5判-4頁)	第22号('89年2月20日) 74頁	第22回(1988)	同志社大学工学部教授 三輪 茂雄
1989(平成元)	岩崎 良文 (本年より学 部長と学会長 を分離)		No.24(6月)(B5判-4頁) No.25(12月)(B5判-4頁)	第23号('90年2月20日) 108頁	第23回(10月14日)	イラストレーター 永田 萌
1990(平成 2)	紀 嘉子		No.26(6月)(B5判-4頁) No.27(6月)(B5判-4頁)	第24号('91年2月20日) 65頁	第24回(6月24日)	女子栄養大学教授・副 香川 芳子 学長
1991(平成 3)	坂本 武人		No.28(6月)(B5判-4頁) No.29(11月)(B5判-4頁)	第25号('92年2月20日) 84頁	第25回(6月29日)	埼玉大学教授 暉峻 淑子
1992(平成 4)	上野 瞭		No.30(6月)(B5判-4頁) No.31(11月)(B5判-4頁)	第26号('93年2月20日) 68頁	第26回(7月4日)	京都府府民相談室室長 岩城 由子
1993(平成 5)	沖中 靖		No.32(6月)(B5判-4頁) No.33(12月)(B5判-4頁)	第27号('94年2月20日) 92頁	第27回(7月3日)	市原平兵衛商店七代目 市原 廣中 当主
1994(平成 6)	小原 弘之		No.34(6月)(B5判-4頁) No.35(11月)(B5判-4頁)	第28号('95年2月20日) 71頁	第28回(7月2日)	高知女子大学家政学部 後藤 昌弘 助教授
1995(平成 7)	馬杉 一恵		No.36(6月)(B5判-8頁)	第29号('96年2月20日) 102頁	第29回(7月1日)	本学家政学部家政学科 村瀬 学 助教授
1996(平成 8)	阿部 登茂子		No.37(6月)(B5判-8頁)	第30号('97年2月20日) 131頁	第30回(6月29日)	本学嘱託講師 牧田 浩
1997(平成 9)	浅川 具美		No.38(6月)(B5判-8頁)	第31号('98年2月20日) 85頁	第31回(10月4日) (家政学会創立30 年記念大会)	本学家政学部家政学科 宮澤 正典 教授
1998(平成 10)	西野 幸典		No.39(6月)(B5判-8頁)	第32号('99年2月20日) 101頁(同志社女子大学 生活科学と名称変更)	第32回(10月3日)	料理研究家 小林 カツ代 弁護士 徳矢 典子
1999(平成 11)	佐々木 佳代		No.40(6月)(B5判-8頁) (生活科学会通信と名称変 更)	第33号('00年2月20日) 90頁	第33回(6月26日)	児童文学者・本学名誉 上野 瞭 教授
2000(平成 12)	黒澤 祝子		No.41(6月)(B5判-8頁)	第34号('01年2月20日) 63頁	第34回(6月28日)	タレント 遙 洋子
2001(平成 13)	西村 公雄		No.42(6月)(B5判-8頁)	第35号('02年2月20 日)77頁	第35回(6月27日)	株式会社クララオンラ 家本 賢太郎 イン代表取締役
2002(平成 14)	宮本 義信		No.43(6月)(B5判-8頁)	第36号('03年2月20日) 92頁	第36回(6月26日)	有限会社田中浩子事務 田中浩子 所代表取締役
2003(平成 15)	宮澤 正典		No.44(6月)(B5判-8頁)	第37号('04年2月20日) 87頁	第37回(6月25日)	びわこ成蹊スポーツ大 河合 美香 学専任講師・本学嘱託 講師
2004(平成 16)	伊藤 節子		No.45(6月)(B5判-8頁)	第38号('05年2月20日) 54頁	第38回(6月30日)	児童養護施設舞鶴学園 桑原 教信 施設長
2005(平成 17)	清水 久美子		No.46(6月)(B5判-8頁)	第39号('06年2月20日) 67頁	第39回(6月29日)	京都大学霊長類研究所 正高 信男 教授

生活科学部 20 周年・生活科学会第 50 回記念大会によせて

学会大会		見学会	研究会	
講演題目	その他		テーマ	講師
「娘と私ー私の家庭観・生活観ー」		KBS 京都および京都新聞社（7月9日）	家政学研究会 生活時間について（前期4回） バイテクノロジーについて（後期3回）（12月6日、13日、20日）	本学家政学部教授 坂本 武人 本学家政学部専任講師 森田 潤司 師
「食生活の安全性を考える」		サントリー山崎工場（7月9日）	手打ちうどんの講習と試食会（12月13日） 講演「生体微量元素 その栄養学的意義」（12月20日）	日清製粉株式会社フラワー手作り教室 京都大学医学部教授 糸川 嘉則
「豊かな暮らしと食の危機」		宝酒造製造工場（7月4日）	「調理缶詰の製造法」ー新製品の開発ー（6月27日） 「最近のフランス料理」（11月14日）	元東洋食品工業短期 下田 吉夫 大学教授 社団法人日本司厨士 西村 修一 協会関西地方本部長
「粉から見た抹茶・そば・うどんなど」		京都友禅福祉会館（7月2日）	和菓子の講習会（11月26日） 「絹を染めてスカーフを作る」（12月3日）	京菓子「末富」主人 山口 富蔵 本学家政学部教授 瀬古 一光
「夢と現実の間で絵を描く楽しみ」				
「食生活と健康」		大阪ガス泉北製造所（9月28日） 鶴屋吉信京菓子館（10月13日）	ホームベーカリーの開発物語（12月15日）	松下電器産業株式会社 田中 郁子 社 （本学卒業生）
「豊かさの中の女性論」		月桂冠株式会社（11月9日）	手作りパンの講習会（10月5日）	日清製粉株式会社フラワー手作り教室
「京都のくらしと食事」		塩芳軒（和菓子）（12月5日）	多重構造鍋を用いた料理教室（10月31日）	（本学卒業生） 渡邊 香保里
「箸 雑感」			「丼」をテーマにした料理教室（10月9日）	千茶道文化学院 石田 二三 （本学卒業生） 代
「雲の上で食べるフランス料理ー真空調理とはどんなものー」		サントリー大山崎工場（12月10日）	ケーキ作りの講習会（12月3日）	ル・シュクリエ（本学卒業生） 浅野 美香
「子どもはなぜ飛ぶことができるかーピーターパンから風の谷のナウシカへー」		清水焼団地（作陶教室）（10月頃）	ケーキ作りの講習会（12月2日）	ル・シュクリエ（本学卒業生） 浅野 美香
「子どもの苦悩に應えるためにー登校拒否の事例を通して考えるー」		友禅美術館古代友禅苑（10月26日）	ケーキ作りの講習会（12月7日）	ル・シュクリエ（本学卒業生） 浅野 美香
「もうひとつの家政学会」	記念祝賀会	清水焼団地（10月18日）	講演「いつまでも“Nice Body”でおれるように！ー肥満になるからだところの仕組みー（12月6日）	奈良県郡山市保健所 大前 利市 主幹
「食に生きる」				
「女が変わる男社会」		「舞妓さんと語ろう！ー京文化へのアプローチー 祇園「吉うた」（10月17日）	講演「ハーブを暮らしに生かす」（12月5日）	ハーバリストくらぶ 浅野目 誠 美山 和
「人生を再読する」		武田ヘルスネットセンター（健康づくりセンター）（12月4日）	講演「モンゴルの文化」ー民族衣装と料理他ー（10月30日）	大阪外国語大学教授 松下 唯夫
「なぜフェミニズムを学ぶのかー男と女の間にあるものー」			生活科学講演会（生活科学会と総合文化研究所共催） 「わたしが子どもだったころー現代の様々な少年問題、少年事件にふれつつー」（11月8日） ケーキ作りの講習会（12月2日）	本学生活科学部 村瀬 学 伊藤 節子 串崎 真志 ル・シュクリエ（本学卒業生） 浅野 美香
「未来を見つめるー21世紀型の生き方とはー」		インスタントラーメン発明記念館（11月17日）	ケーキ作りの講習会（12月1日）	ル・シュクリエ（本学卒業生） 浅野 美香
「食の大切さを伝えるしくみ創り」		香老舗 松栄堂 長岡京工場（11月29日）	包丁、組板文化論のお話と料理（実習、試食）講習（10月12日）	祇園「いし田」大将 石田 静飛 虎
「スポーツと栄養をマネジメントする」		紫織庵（京のじゅばん&町家の美術館）（11月8日）	和菓子作り（11月19日）	京菓子司「よし廣」
「子ども虐待を巡ってー児童養護施設の立場からー」			エコクッキング（10月23日） ふさ・よりひもの講演と携帯ストラップ作り（12月1日）	財団法人キープ自然 田村 由紀 学校クッキングディレクター 宮本株式会社社長 宮本 隼史
「ケータイを持ったサル」		冷泉家（現存する唯一の公家屋敷）（11月26日）	和菓子講習会（10月12日）	亀屋良長八代目 吉村 良和 亀屋良長職長 山下 順一

同志社女子大学生生活科学 Vol. 50 (2016)

年度	会長	家政学だより	学会通信	学会誌	学会大会	
					日時	講師
2006(平成 18)	村瀬 学		No.47(6 月)(B 5 判-8 頁)	第40号('07 年 2 月20日) 89 頁	第40回(6 月28日)	製作マザーランド
2007(平成 19)	猿田 佳那子		No.48(6 月)(B 5 判-8 頁)	第41号('08 年 2 月20日) 58 頁	第41回(6 月 2 日)	宮崎 吾朗
2008(平成 20)	森田 潤司		No.49(6 月)(B 5 判-8 頁)	第42号('09 年 2 月20日) 43 頁	第42回(6 月25日)	日本熊森協会会長 森山 まり子
2009(平成 21)	山田 恭正		No.50(6 月)(B 5 判-8 頁)	第43号('10 年 2 月20日) 100 頁	第43回(6 月 6 日)	群馬大学教育学部教授 高橋 久仁子
2010(平成 22)	高原 まり子		No.51(6 月)(B 5 判-8 頁)	第44号('11 年 2 月20日) 109 頁	第44回(7 月 7 日)	創業二百年「魅太」八 青木 太兵衛 代当主
2011(平成 23)	諸井 克英		No.52(6 月)(B 5 判-8 頁)	第45号('12 年 2 月20日) 133 頁	第45回(7 月 2 日)	共立女子短期大学生生活 渡辺 明日香 学科准教授
2012(平成 24)	森田 潤司		No.53(6 月)(B 5 判-8 頁)	第46号('13 年 2 月20日) 132 頁	第46回(6 月 6 日)	本学学芸学部情報メデ 川田 隆雄 ィア学科教授
2013(平成 25)	仲佐 輝子		No.54(6 月)(B 5 判-8 頁)	第47号('14 年 2 月20日) 100 頁	第47回(6 月26日)	本学生活科学部人間生 清水 久美子 活学科特別任用教授
2014(平成 26)	岩谷 幸春		No.55(6 月)(B 5 判-8 頁)	第48号('15 年 2 月20日) 122 頁	第48 回(6 月25日)	「京料理 木之婦」三 高橋 拓児 代目当主
2015(平成 27)	村瀬 学		No.56(6 月)(B 5 判-8 頁)	第49号('16 年 2 月20日) 120 頁	第49回(6 月24日)	同志社大学同志社社史 小枝 弘和 資料センター 社史資 料調査員
2016(平成 28)	小松 龍史		No.57(6 月)(B 5 判-8 頁)	第50号('17 年 2 月20日) 119 頁	第50回(10月 8 日) (生活科学部 20 周 年・生活科学会 50 回記念大会)	京都外国語大学外国語 ジェフ・ノバー 学部英米語科教授・京 グランド 都国際観光大使

生活科学部 20 周年・生活科学会第 50 回記念大会によせて

学会大会		見学会		研究会	
講演題目	その他		テーマ	講師	
映画会「こどもの時間」		京菓子司 俵屋吉富（烏丸店）京菓子資料館（10月7日）	講演「地域と食育」（11月1日）	大阪府立清水谷高校 岡本 真澄 教諭	
「『ゲド戦記』と父・宮崎駿を語る」		懐石・宿「近又」 テーマ「京町屋と食育」（9月20日）	ヤクルト（株）本社 京都工場 見学と製品の衛生管理についての 講義と質疑応答（10月20日）		
「クマたちが棲む豊かな森を次世代へ」		SOU・SOU ショップ 4 店舗（9月22日）	講演「うま味の発見から1世紀を経てーだしの味の秘密ー」（10月18日）	味の素（株）ライフ 河合 美佐 サイエンス研究所 子 巴 美樹 研究員	
「『食べもの神話』の落とし穴」		西陣織会館の和装学院（7月4日） 八つ橋庵とししゅうやかた（10月3日）	テーブルマナー（西洋料理）を学ぶ（10月31日）	京都ブライトンホテル	
「京都の食文化－京生麩」		香老舗 松栄堂 長岡京工場（11月29日）	日本茶の講義とおいしい煎茶の淹れ方（11月6日）	一保堂茶舗	
「TOKYO ストリートファッション考現学－若者たちの装いのゆくえー」		聴竹居（11月6日）	講演「だいいょうぶ？あなたの下着選び」（11月16日）	（株）ワコール	
「プレゼンテーション技法－問題マップの極意－」		丸久小山園横島工場（7月7日）	講演「女性のためのこれからのライフプラン」（11月21日） 講演「デートDVの被害者にならないために」（12月12日）	CFP・1級ファイナンシャルプランニング技能士（本学卒業生） ウイメンズカウンセ 福岡 とも リング京都 み	
「新島八重と洋装－ドレスの再現製作をめぐって－」		（株）ニチレイフーズ関西工場（11月30日）	日本茶の講義とおいしい煎茶の淹れ方（11月9日）	一保堂茶舗	
「日本料理の文化と味覚」		丸久小山園横島工場（8月2日）	講演「酒類調味料と調理効果」～お酒のチカラでもっとおいしく～（10月8日）	宝酒造株式会社	
「同志社のはじまりと京都－140年前の同志社と『八重の桜』のその後を考えるー」		京都市北区中川地区「北山杉の里を訪ねて」（11月7日）	講演「人とペットの「共生」－ペットへの対応力から問題解決力を探る－（10月14日）	ペット法学会副理事 吉田 真澄 長・弁護士	
「You are what you eat.－京都で育む受信力－」	茶話会	毘沙門堂 勝林寺 座禅体験（11月5日）	和菓子作り講習会（12月14日）	京菓子講師倶楽部 岡本 隆史 （かま八老舗） 宮脇 巖 （亀屋友永）	

年表3 学部公開講演会・講座（講演会の要旨は『同志社家政』第1号（1967）～第31号（1997）および『同志社女子大学生生活科学』第32号（1998）～第34号（2000）に掲載されている。）

年度	家政学講演会・生活科学講演会（総合文化研究所主催分を含む）	講座
1967(昭和42)	渡辺 英一 中村 明子 林 淳一 少年非行－非行少年の不安傾向－（11月8日） 同志社女子大学の二教室における環境衛生の年間推移（11月8日） 小麦粉および捏粉（ドウ）の熟伝導率（11月8日）	
1968(昭和43)	紀 嘉子 片山 登美子 久次米 哲子 家計費における食物費－食品の購入回数について－（11月6日） 幼児と絵本－絵本の与え方について－（11月6日） タンパク質の摂取量について（11月6日）	
1969(昭和44)	黒澤 祝子 松下 紀美子 瀬古 一光 大豆タンパク質への酵素剤の応用（11月5日） 食品の血漿コレステロールに及ぼす影響（11月5日） 高分子触媒による繊維加工（11月5日）	
1970(昭和45)	玉置 日出夫 坂本 武人 酵母におけるグルコアミラーゼの生成と利用（10月28日） 女子大生の家庭観・結婚観（10月28日）	
1971(昭和46)	柴田 幸雄 馬杉 一重 芳香族アミノ酸代謝とアミノ酸バランス（10月27日） 環境温度の急変事における衣服の調節作用（10月27日）	生活科学講座 第1回 林 淳一 生活の中の物性学
1972(昭和47)	阿部 登茂子 沖中 靖 実験的カドミウム中毒に関する研究（10月25日） トリプトファン系アミンとその代謝調節（10月25日）	生活科学講座 第2回 大塚 肇 日常生活と界面化学
1973(昭和48)	浅川 具美 仁木 久美子 粉末状食品中の油脂の変質について（10月24日） 南蛮風俗とその影響（10月24日）	生活科学講座 第3回 坂本 武人 生活福祉の条件－所得と物価－
1974(昭和49)	佐々木 佳代 松山 雄吉 大都市問題と大量消費生活様式（10月30日） 日本脳炎とその疫学研究（10月30日）	
1975(昭和50)	安藤 孝雄 上野 瞭 米胚乳部の微細構造（10月29日） E. L. カニグズバークの児童文学（10月29日）	
1976(昭和51)	松本 博 紀 嘉子 用量作用曲線による薬用作用の解析（10月27日） 家政学の独立科学としての成立基盤について（10月27日）	
1977(昭和52)	馬杉 一重 小原 弘之 着衣時の汗の蒸発（10月26日） マツタケと近縁種の生態－その寄生植物を中心として－（10月26日）	
1978(昭和53)	清水 久美子 木咲 弘 平安時代の風流風俗とその周辺（10月26日） ビスケットの香気について（10月26日）	
1979(昭和54)	阿部 登茂子 片山 登美子 アルコール中毒とビタミン B ₁ 代謝（10月24日） 家庭科教育の本質について－男女共修論を中心に－（10月24日）	
1980(昭和55)	唐澤 郁夫 渡邊 英一 西洋・金時ニンジン色およびエビ・カニの色をめぐって（10月22日） 子供の発達と教育－3歳児健康診査にみる親と子－（10月22日）	
1981(昭和56)	大塚 肇 瀬古 一光 乳化のメカニズムを探る－卵黄の乳化性を中心に－（10月21日） 絹の染（10月21日）	
1982(昭和57)	黒澤 祝子 坂本 武人 シューに関する研究（10月20日） 生活構造の変化と家政学の新しい課題（10月20日）	『児童文学セミナー』（10月21日）（世話人上野瞭） 谷川俊太郎：私の絵本・私の詩 灰谷健次郎：鳥で考えたこと 今江祥智：児童文学はどこへゆく
1983(昭和58)	林 淳一 和菓子の研究をめぐって（10月26日）	『1983年度 同志社女子大学家政学講座』第1号、1983年12月28日（括弧内は講座実施日） 安藤孝雄：巻頭言『家政学講座』の刊行にあたって、p.1 坂本武人：家計構造の変化と新しい家政学の課題、pp.3-10（10月15日 本学楽真館 R 205） 瀬古一光：衣料消費の生活科学、pp.11-19（10月1日 本学楽真館 R 205） 小原弘之：菌食のすすめ－キノコ利用学入門－、pp.21-27（10月1日 本学楽真館 R 205） 岩崎良文：動脈硬化と食事について、pp.29-31（10月15日 本学楽真館 R 205） 大塚 肇：界面活性剤と食生活、pp.33-42（10月25日 本学楽真館 R 205） 木咲 弘：『日本型食生活』における加工食品のありかた、pp.43-52（10月25日 本学楽真館 R 205）
1984(昭和59)	佐々木 佳代 松下 紀美子 先端技術と日本経済の進路（10月24日） 糖尿病患者の血清脂質に影響する諸因子について（10月24日）	『1984年度 同志社女子大学家政学講座』第2号、1985年3月25日（括弧内は講座実施日） 渡邊英一：家政学における児童学をめぐって－最近の児童心理学卒業論文から－、pp.1-7（9月29日 本学楽真館 R 205） 林 淳一：和菓子をめぐって、pp.9-24（9月29日 本学楽真館 R 205） 松山雄吉：食物による危害を防止するために、pp.25-28（10月6日 本学楽真館 R 205） 馬杉一重：衣料障害の現状と対策、pp.29-34（10月6日 本学楽真館 R 205） 森田調司：バイオテクノロジーのことば概説、pp.35-46（10月13日 本学楽真館 R 205） 浅川具美：食用油脂のいたみ、pp.47-56（10月13日 本学楽真館 R 205）

生活科学部 20 周年・生活科学会第 50 回記念大会によせて

年度		家政学講演会・生活科学講演会（総合文化研究所主催分を含む）	講座
1985(昭和 60)	上野 瞭 仲佐 輝子 佐々木高明	児童文学の「現在」（10 月 23 日） ラットにおける Aromatic L-Amino Acid Decarboxylase とビタミン B ₁ 〈家政学部特別講義〉日本文化の起源と照葉樹林文化（12 月 12 日）	『1985 年度 同志社女子大学家政学講座』第 3 号、 1985 年 10 月 1 日（括弧内は講座実施日） 松山雄吉：食物による危害を防止するために （続）、pp.1-6（10 月 5 日 本学楽真館 R 205） 坂本武人：家計診断の必要性和方法、pp.7-15（10 月 5 日 本学楽真館 R 205） 清水久美子：女房の晴装束（十二単）について、 pp.17-34（10 月 12 日 本学楽真館 R 205） 沖中 靖：話題のビタミン ACE、pp.35-43（10 月 12 日 本学楽真館 R 205） 深田尚彦：描画講堂の心理学的研究、pp.45-61（10 月 19 日 本学楽真館 R 205） 岩崎良文：消化器疾患と栄養、pp.63-69（10 月 19 日 本学楽真館 R 205）
1986(昭和 61)	浅川 具美 玉置 日出夫	食品中の脂質の変化と調理（10 月 22 日） 酵母の細胞融合による異種遺伝子の導入（10 月 22 日）	『1986 年度 同志社女子大学家政学講座』第 4 号、 1987 年 3 月 1 日（括弧内は講座実施日） 深田尚彦：児童画の心理学的・教育学的意義、pp.1 -7（1 月 28 日 日の本女子短期大学） 木咲 弘：加工食品の進歩、pp.9-15（9 月 27 日 東 京銀座教文館ビル） 坂本武人：教育費を中心とする生活設計、pp.17-24 （9 月 8 日 広島国際ホテル） 瀬古一光：繊維製品の消費科学－利口な消費者とな るために－、pp.25-31（10 月 17 日 二条城前全日空 ホテル）
1987(昭和 62)	深田 尚彦 西野 幸典	児童画と社会（10 月 21 日） ビタミン B ₁ 研究の現状（10 月 21 日）	『1987 年度 同志社女子大学家政学講座』第 5 号、 1988 年 3 月 31 日（括弧内は講座実施日） 深田尚彦：“子供研究”への序説、pp.1-11（9 月 25 日 宝塚花屋敷幼稚園） 木咲 弘：日本の食生活の現状ならびに健康をまも る脂質と無機質、pp.13-20（7 月 27 日 宝塚保健所 ・8 月 29 日 広島厚生年金会館・9 月 13 日 京都グ ランドホテル） 大塚 肇：食品の品質と食品乳化剤の役割、pp.21- 28（9 月 24 日 東京銀座教文館） 坂本武人：国際化時代における家庭経営、pp.29-40 （10 月 20 日 福山ニューキャッスルホテル・10 月 21 日 名古屋国際センタービル） 瀬古一光：墨流し・糊流し・ろうけつ染、pp.41-46 （9 月 5 日 本学楽真館 R 501 実験室）
1988(昭和 63)	沖中 靖 森田 潤司	プリン塩基の代謝と葉酸化合物（10 月 19 日） 食品・細胞成分からの酸素ラジカル生成と DNA 損傷作用（10 月 19 日）	
1989(平成元)	馬杉 一重 山田 恭正	衣服と汗（10 月 18 日） 柑橘果実由来の生理活性物質の構造解析（10 月 18 日）	
1990(平成 2)	岩谷 幸春 岩崎 良文	コメの内外価格差と消費者問題（10 月 17 日） 糖尿病治療の新しい流れ（10 月 17 日）	
1991(平成 3)	宮本 義信 長崎 寿栄	家族支援の方法論－社会福祉の立場から－（10 月 16 日） 食物中の D-アミノ酸（10 月 16 日）	
1992(平成 4)	安藤 孝雄 川崎 祐子	卵の加熱調理における緑変の抑止（10 月 21 日） 酵母のビタミン B ₁ 生成とその調節（10 月 21 日）	
1993(平成 5)	紀 嘉子 小原 弘之	アメリカに於ける家政学改革の原点（10 月 20 日） マツタケ人工増殖の系譜（10 月 20 日）	
1994(平成 6)	清水 久美子 阿部 登茂子	文楽の衣装について－時代物における武家の衣装を中心に－（10 月 19 日） 高齢者の食生活と栄養（10 月 19 日）	
1995(平成 7)	坂本 武人 浅川 具美	社会思想史から生活科学へ－40 年の研究歴を振り返って－（10 月 18 日） 調理素材としての香辛料の抗酸化性について（10 月 18 日）	
1996(平成 8)	佐々木 佳代 黒澤 祝子	企業と環境－ISO 14000 をめぐって－（10 月 16 日） ポリフェノール含有野菜の調理学的研究－特にナスを中心に－	
1997(平成 9)	猿田 佳那子 山本 寿	HTML による衣服固有属性識別支援ファイルの作成（11 月 24 日） 電子ドキュメント入門（11 月 24 日）	
1998(平成 10)	野崎 康明 西野 幸典	アメリカにおけるウエルネス SPA のプログラムと運営（11 月 22 日） 内分泌攪乱物質について考える（11 月 22 日）	
1999(平成 11)	岩谷 幸春 長崎 寿栄	少子・高齢社会と男女共同参画社会実現の条件（10 月 27 日） 栄養情報とその処理－情報を処理する事は機械の仕事か？－（10 月 27 日）	
2000(平成 12)	伊藤 節子 串崎 真志 村瀬 学	わたしが子どもだったころ－現在の様々な少年問題、少年事件にふれ つつ－（生活科学会と総合文化研究所との共催）（11 月 8 日）	

謝辞

本稿をまとめるにあたっては2016(平成28)年度生活科学会運営委員の川崎祐子先生に資料提供などで大変お世話になった。御礼申し上げる。学会関係の資料収集にあたっては、生活科学会事務局の中村太津子さんにお世話になった。また、年表の作成には森 遙子さんのお世話になった。ここに感謝申し上げる。本拙文が、学芸学部音楽学科⁶²⁾や同志社女子大学英語英文学科⁶⁶⁾のように、将来、「生活科学部史」や「同志社女子大学生活科学会史」を編纂する際の一助となれば幸いである。

参考資料

〔資料1〕は1996(平成6)年12月2日付け「同志社女子大学家政学部および家政学部家政学科、家政学部食物学科ならびに家政学部食物学科食物学専攻名称変更届」である。〔資料2〕では、生活科学部(家政学部)に関係する教職員の方々が折々に書かれたものや退職時のお言葉、追悼文をその他の関係資料とともに掲げた。〔資料3〕は参考とした文献類である。

なお、本文中ではいちいち引用資料を示していない。

〔資料1〕⁹²⁾

平成6年12月2日

同志社女子大学家政学部および家政学部家政学科、家政学部食物学科ならびに家政学部食物学科食物学専攻名称変更届

学校法人 同志社

1. 名称変更する趣旨および時期等

1.1 名称変更の趣旨および理由

1.1.1 「家政学部」から「生活科学部」への名称変更の趣旨および理由

1.1.1.1 社会的要請および果たすべき役割

家政学部は、昭和24年、キリスト教主義と国際主義およびリベラル・アーツ教育という本学の三つの教育理念を基本において設置された学芸学部食物学専攻を母体としている。その後、種々の変遷を経て、昭和42年家政学科および食物学科からなる「家政学部」として独立した。以来、多様化し、高度化する社会からの要請に応じて、随時教育内容の見直しを行ってきた。

家政学部発足当時においては、人間生活の基本単位は「家」にあり、そこでの生活に関連した物資の消費量や

排出量が環境に与える影響はそれほど大きいものではなかった。しかし近年、社会状況は著しい変化を示し、飛躍的な経済発展、国際化の進行に伴い、家庭生活にも一定の質的な向上がもたらされたが、その一方で、さまざまな分野において深刻な問題が生まれ、精神的にも肉体的にも人類の健康が阻害される要因が増加しつつある。このような社会的背景のもとで、大きく変化しつつある生活スタイルに対応して、人間生活のあり方を単に家庭という枠組みの中でのみとらえるのではなく、広く人間生活全般にかかわる諸事象に関してさまざまな角度からアプローチすることにより、現代の科学技術文明のもとに生きる人間と、その生活のあり方を科学的に分析し、説明する必要性が強く要請されている。

本学部は、あらゆる生活場面およびその背景を科学的な分析の対象とし、その基礎理論と応用技術の研究・教育に重点をおき、それらを社会的な場において有効に活用できる指導の人材を養成し、あわせて学部の研究・教育活動をもって、社会的に貢献することを主目的とする。

1.1.1.2 名称変更の必要性

本学部の教育課程は、上記の目的を達成するための内容をもっており、すでに一定の成果を上げてきた。すなわち、生活科学部教育課程概念図に示したように、本学の教育理念であるキリスト教主義、国際主義、およびリベラル・アーツ教育を生かす自由学芸科目の上に、学科科目として生活全般を概観・研究する学部共通科目および学科共通科目が設置されている。さらに後述するように、人間生活を総合的に研究・教育の対象とする学科と、変化しつつある食環境を包括的、科学的に研究・教育の対象とする学科とがあり、それぞれの学科科目は人間生活の諸側面を学際的に学習するための科目群から構成されている。また、これらの目的を達成できる研究・教育体制を整え、本学の教育理念を追及しつつ現在の社会的要請に役立ててきた。このように、家庭生活のみに限定されず、地域・社会生活にも密着した学問領域として、生活のあり方を総合的、科学的に研究・教育する方向を目指した現行の教育内容と、教員の研究分野を明確に示す学部名としては、『生活科学部』が最も適切である。

1.1.2 「家政学科」から「人間生活学科」への名称変更の趣旨および理由

1.1.2.1 社会的要請および果たすべき役割

今日のわれわれの生活をとりまく社会状況は著しい変化をとげてきた。とりわけ技術革新にともなう経済発展によって、生活の快適度は飛躍的に高まり、生活にも一定の質的向上がもたらされた。しかしその一方で人間生活は、消費者問題、食生活問題、老人問題、ゴミ問題などさまざまな問題に直面しており、これらを一つ一つ解決して「真にゆとりある国民生活」を確立していくことが緊急の課題となっている。すなわちわが国が経済大国から生活大国へ変質しつつある中で、そこから生じた種々の社会的問題を解決することが切実な社会的要請となっているのである。

つまり、現代日本が生活優先の時代にむかいつつあるとするならば、人間生活を主要な研究対象とし、人間生活の質を総合的に高める方策について研究・教育する学問領域として、「人間生活学」に対する社会的要請は急速に高まっているといえよう。

上述のような社会的要請に応えるべく本学科は、学科科目および自由学芸科目の履修を通じ、健康で快適、安全な文化的生活を営むことのできる条件を多角的に研究するとともに、人間生活に伴う諸問題の発生要因にも目を向け、その解消への道を探求するものである。そのためには第一に、人間生活を構成している諸条件に目を向け、それがどのような法則・秩序を有しているかを科学的、客観的に認識することのできる人材を養成すること。第二に。家庭・地域・社会などの場において、幅広い専門的な科学的知識と情報の正しい認識能力とを有し、人間生活の全般的な向上のための意思決定が行える人材を養成することを目指すものである。

1.1.2.2 名称変更の必要性

本学科においては、上述のような社会状況の変化、すなわち技術革新による経済発展とそれによる生活の質的向上、その一方で、資源の浪費、自然環境破壊、そしてまた高齢化社会への突入など解決しなければならない諸問題を背景として、人間生活の安定と向上に資する研究を直接的な課題とし、健全な人間生活のありかたに関する社会の要請に応えるため、研究・教育体制を整え、また随時教育内容の改正を行ってきた。

すなわち現行の教育課程は、消費経済学、都市経済学、社会福祉学、住生活学、被服衛生学などにみられるように生活主体としての人間生活をその社会・経済的基盤において幅広くとらえ、人間・生活・環境の関係とその相互作用を正しく認識し、各個人の生活のあるべき姿を探究する立場にたち構成されている。したがって、本

学科の教育内容が単に家庭内における生活技術の追及のみにとどまらず、広く人間生活全般にかかわる諸問題を、さまざまな角度からアプローチすることにより、多元的な人間生活学を目指したものである以上、『人間生活学科』と名称変更することが最も適切である。

1.1.3 「食物学科」から「食物栄養科学科」へ、「食物学科食物学専攻」から「食物栄養科学科食物科学専攻」への名称変更の趣旨および理由

1.1.3.1 社会的要請および果たすべき役割

食物をとりまく現状は、急激な経済成長や国際化に伴う輸入食品の増加、食物の大量消費や大量廃棄などによって、ポストハーベスト農薬や食品添加物、食物過剰摂取や栄養の偏り、環境汚染など健全な食生活の維持に影響を及ぼすさまざまな問題を生みだしている。こうした状況をふまえて、食物に関する正しい認識と、健康維持のための栄養の意義とを具体的に示し、きたるべき 21 世紀にふさわしい新しい価値観の創造と、それを意識したライフスタイルのもとでの食生活のあり方を確立し、社会へ提言することが求められている。

本学科が目指しているものは、食物をとりまくさまざまな環境の変化に対応して、また食生活が環境に与える影響についても正しく認識したうえで、常に健全な食生活を展開するための意思決定が行える指導的人材を養成することである。また本学科には 2 つの専攻があり、このうち「食物学専攻」は個々の食生活からそれをとりまく食環境に至るまでを視野に入れて、科学的な思考力をもって教育指導できる人材の養成を、また「管理栄養士専攻」は広い視野から食物のもつ基本的役割を科学的に理解し、適切な栄養指導ができる管理栄養士の養成を、それぞれ目的とするものである。

1.1.3.2 名称変更の必要性

本学科においては、食物をとりまく社会状況の変化、食料生産技術・加工技術・分析技術などの著しい進歩、生体や食品に関する学問の進展などに照応して研究・教育体制を整え、上述の目的達成のため、食生活を含めた生活環境の総合的な正しい理解と認識を深める方向で教育内容の改正を行ってきた。

「食物学専攻」における現行の教育課程は、食品環境学、食品バイオテクノロジー、食品機器分析学、調理科学、食品衛生学などにみられるように新しい価値観と、それを意識したライフスタイルのもとでの食生活のあり

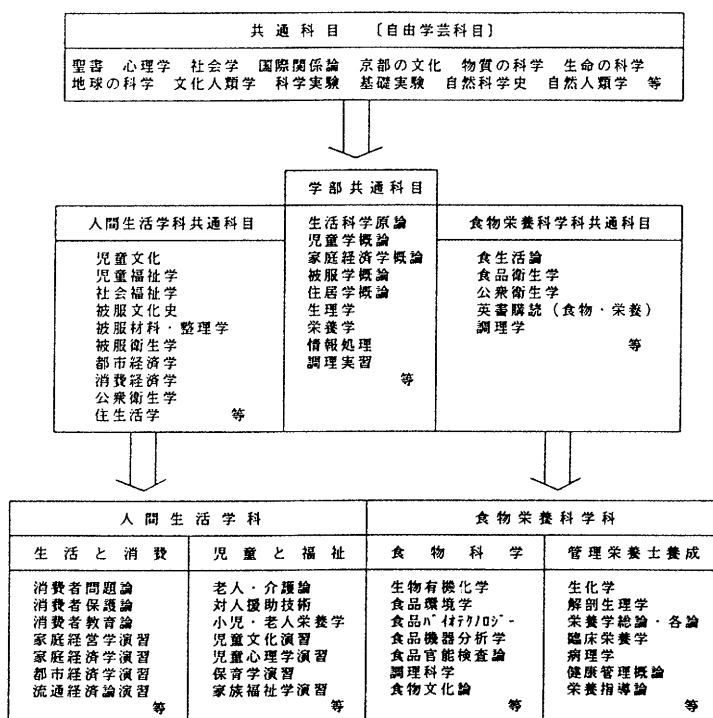
方の確立のため、食物について食品学、調理学、栄養学の各分野を科学的に学ぶ教育体系の立場にたって構成されており、すでに有能な教育者や指導者を社会におくりだしてきた。すなわち本専攻の教育内容が食物を科学の目を通して研究・教育する立場から構成されているので、その内容を明確に表わすためには「食物科学専攻」と名称変更することが適切である。

「管理栄養士専攻」における教育課程は、生化学、解剖生理学、病理学などによる基礎学力を習得した上で、栄養学、食品学、臨床栄養学、公衆衛生学など食物・栄養・健康に関する基本的な知識を、栄養指導の実践の場

に応用できるように構成されており、すでに専門教育の実をあげ、有能な管理栄養士や研究者を社会におくりだしてきた。したがって本専攻の名称は管理栄養士養成の目的を十分に明示したものであると考えられるので、変更は行わない。

このように本学科が「食物科学専攻」と「管理栄養士専攻」からなり、それぞれの教育内容が自然科学を基盤として構成されているので、これら2専攻を統合する名称としては『食物栄養科学科』とすることが、学科内容を最も適切に表わす。

生活科学部教育課程概念図



【資料 2】

- 1) 木咲 弘：「家政学科の現状」、『同志社創立九十周年記念誌 1875-1965』, pp.86-88, 同志社女子大学・同志社女子高等学校・同志社女子中学校・同志社同窓会, 1965
- 2) 別所秀子：「創刊の辞」、『同志社家政』, 創刊号, 巻頭, 1968
- 3) 越智文雄：「同志社女子大学 家政学会誌 創刊を祝して」、『同志社家政』, 創刊号, 巻頭, 1968
- 4) 片山登美子・松下紀美子・尾西玲子：「同志社女子大学家政学会の発足について」、『同志社家政』, 創刊号, 巻頭, 1968
- 5) 家政学会長（林 淳一, 林 淳一, 唐澤郁夫, 唐澤郁夫, 小山松治郎, 小山松治郎, 大塚 肇, 大塚 肇, 唐澤郁夫）：「巻頭言」、『同志社家政』, 第 2 号-第 10 号, 1969-1977
- 6) 別所秀子：「同志社女子大学の家政学会発足前後に思う」、『同志社家政』, 第 7 号, pp.3-8, 1973
- 7) 久次米哲子：「家政学の歴史とその行く手」、『同志社家政』, 第 7 号, pp.9-11, 1973
- 8) 玉置日出夫：「生長と発育」, 同志社女子大学家政学会通信, No.3, p.1, 1978
- 9) 上野直蔵〔編纂・発行〕：『同志社 100 年史 通史編一・通史編二』, 学校法人同志社, 1979
- 10) 別所秀子：「大正期の同志社女子学校専門学部を訪ねて」、『しばぐさ 学報第 19 号』, pp.8-27, 1980
- 11) 越智文雄：「定年を迎えて思うことども」、『しばぐさ 学報第 19 号』, pp.28-31, 1980
- 12) a. 「唐澤先生追悼の記」（大塚 肇：「在りし日の唐澤先生を偲ぶ」・越賀玲子：「唐澤先生を偲ぶ」）, 『しばぐさ 学報第 21 号』, pp.31-35, 1983 / b. 木咲 弘：「唐澤郁夫教授 追悼文」, 『同志社家政』, 第 15 号, 巻頭, 1982
- 13) a. 安藤孝雄：「小山松治郎教授 追悼文」, 『同志社家政』, 第 16 号, 巻頭, 1982 / b. 「同志社とともに 30 年 小山松治郎先生逝く」, 同志社女子大学通信, 第 33 号, p.1, 1982 / c. 「小山先生追悼の記」（故 小山松治郎先生略歴・小原弘之：「小山松治郎先生を偲ぶ」・吉岡ますみ：「小山先生を偲んで」）, 『しばぐさ 学報第 22 号』, pp.30-35, 1983
- 14) a. 松本 博：「退職に当たって」, 『しばぐさ 学報第 22 号』, pp.47-48, 1983 / b. 松山雄吉：「松本先生を送ることは」, 『しばぐさ 学報第 22 号』, pp.48-50, 1983
- 15) a. 渡邊英一：「定年退職に際してー今は亡き先生方を偲んでー」, 『しばぐさ 学報第 24 号』, pp.30-33, 1985 / b. 上野 瞭：「藍より青くー渡邊先生をお送りする言葉ー」, 『しばぐさ 学報第 24 号』, pp.33-34, 1985
- 16) a. 松山雄吉：「京都への道は遠かった」, 『しばぐさ 学報第 25 号』, pp.48-50, 1986 / b. 阿部登茂子：「松山先生をお送りする言葉」, 『しばぐさ 学報第 25 号』, pp.51-52, 1986
- 17) a. 大塚 肇・片山登美子・阿部登茂子・武田玲子：「追悼 松下紀美子先生」, 同志社女子大学家政学会通信, No.19, pp.2-3, 1986 / b. 馬杉一重：「松下紀美子先生をお偲びして」, 『しばぐさ 学報第 26 号』, pp.52-53, 1987 / c. 沖中 靖：「松下紀美子教授 追悼文」, 『同志社家政』, 第 20 号, 巻頭, 1986 / d. 齋藤 昇：「松下紀美子先生の思い出」, 『同志社家政』, 第 20 号, i - ii, 1986 / e. 片山登美子：「松下紀美子先生を偲んで」, 『同志社時報』, No.82, pp.88-91, 1987
- 18) 深田尚彦：「同志社女子大学家政学会のこと」, 『しばぐさ 学報第 26 号』, pp.22-29, 1987
- 18') a. 中島和子：「同志社女子大学英文学会」, 『しばぐさ 学報第 26 号』, pp.14-21, 1987 / b. 中 皓：「同志社女子大学日本語日本文学会について」, 『しばぐさ 学報第 26 号』, pp.30-31, 1987 / c. 井岡 妙・松村英世・渋谷ヒロ子：「音楽学科頌啓会沿革」, 『しばぐさ 学報第 26 号』, pp.32-37, 1987
- 19) a. 大塚 肇：「在職三十八年を回顧して」, 『しばぐさ 学報第 27 号』, pp.66-68, 1988 / b. 木咲 弘：「大塚先生との出会い」, 『しばぐさ 学報第 27 号』, pp.68-69, 1988 / (注：「同志社女子大学家政学部学会通信」に掲載はなし)
- 19') a. 大塚 肇：「同志社と私の人生」, 『学内礼拝』 No.42, pp.1-2, 1987 / b. 大塚 肇：「同志社と私の人生（続）」, 『学内礼拝』, No.45, pp.3-4, 1987
- 20) a. 大塚 肇：「《定年を迎えられた先生方》 久次米哲子先生」, 『しばぐさ 学報第 13 号』, pp.24-25, 1974 / b. 木咲 弘：「久次米哲子先生を偲んで」・沖中 靖：「久次米先生を偲んで」・阿部登茂子：「久次米子先生を偲んで」, 同志社女子大学家政学部学会通信, No.23, pp.2-4, 1988 /

- c. 木咲 弘：「久次米哲子先生を偲んで」、『同志社家政』，第 22 号，巻頭，1988
- 21) a. 瀬古一光：「同志社女子大学を去るに当たって」，同志社女子大学家政学会通信，No.23，p.1，1988／b. 瀬古一光：「同志社女子大学を去るに当たって」，『しばぐさ 学報第 28 号』，pp.70-71，1989
- 22) a. 深田尚彦：「退職の時に臨んで」，同志社女子大学家政学会通信，No.23，p.3，1988／b. 深田尚彦：「28 年間の回顧」，『しばぐさ 学報第 28 号』，pp.68-69，1989
- 23) 石田 章：「人間に優しい・他人のための学問ーいまなぜ家政学部かー」，同志社女子大学家政学会通信，No.29，p.2，1991
- 24) 「順不同・ずばり一言！ 10 年後の家政学を考える」，同志社女子大学家政学会通信，No.28，pp.2-3，1991
- 25) 林 淳一：「家政学会二十五年」，同志社女子大学家政学会通信，No.31，p.2，1992
- 26) a. 林 淳一：「同志社を去るにあたって」，『しばぐさ 学報第 32 号』，pp.64-65，1993／（注：「学会通信」に退職メッセージの掲載なし）
- 27) 房岡昭一：「回想」，『しばぐさ 学報第 32 号』，pp.69-72，1993（注：今出川校地女子部，田辺校地女子大学，建物変遷記録表がある。）
- 28) a. 木咲 弘：「回想」，『しばぐさ 学報第 33 号』，pp.59-60，1994／b. 木咲 弘：「定期券入れ」，同志社女子大学家政学会通信，No.34，p.2，1994
- 29) a. 上野 瞭：「次の駅で降ります」，『しばぐさ 学報第 33 号』，pp.67-68，1994／b. 上野 瞭：「リタイア目録」，同志社女子大学家政学会通信，No.34，p.2，1994
- 30) 小林五十鈴：「草創のころ」，『しばぐさ 学報第 33 号』，pp.69-70，1994
- 31) 馬杉一重：「これまでの実績の上に未来を」，同志社女子大学家政学会通信，No.36，p.1，1995
- 32) a. 唐沢郁夫：「《定年を迎えられた先生方》 別所秀子先生」，『しばぐさ 学報第 13 号』，p.24，1974／b. 安藤孝雄：「故 別所秀子先生を偲んで」，同志社女子大学家政学会通信，No.36，p.7，1995
- 33) a. 安藤孝雄：「『なくなった寮の物語』後日譚」，『しばぐさ 学報第 35 号』，p.40，1995／b. 安藤孝雄：「米飯嗜好の変化」，同志社女子大学家政学会通信，No.37，p.2，1996
- 34) a. 馬杉一重：「退職にあたって」，『しばぐさ 学報第 35 号』，p.41，1995／b. 馬杉一重：「愛されて」，同志社女子大学家政学会通信，No.37，p.2，1996
- 35) 沖中 靖：「家政学部から生活科学部へ」，同志社女子大学家政学会通信，No.36，p.2，1995
- 36) 片山登美子：「家政学会誕生の頃」，同志社女子大学家政学会通信，No.36，p.3，1995／（注：退職メッセージは『しばぐさ』，「同志社女子大学生生活科学学会通信」いずれもなし）
- 37) a. 坂本武人：「退職にあたって想い起こすこと＝感謝」，『しばぐさ 学報第 35 号』，p.43，1995／b. 坂本武人：「生活問題の「なぜ」に答える専門家に」，同志社女子大学家政学会通信，No.37，p.2，1996
- 38) a. 森田潤司：「林 淳一先生を悼む」，『しばぐさ 学報第 36 号』，p.42，1996／b. 阿部登茂子：「林淳一名誉教授の御経歴と追悼に寄せて」，『同志社家政』，第 30 号，巻頭，1996／c. 長岡正代：「林淳一先生を悼んで」，同志社女子大学家政学会通信，No.38，p.2，1997／d. 小原弘之：「林淳一先生を偲んで」，『同志社時報』，No.103，p.80，1997
- 39) 浅川具美「創立 30 周年にあたって」，同志社女子大学家政学会通信，No.38，p.1，1997
- 40) 浅川具美：「同志社女子大学家政学会 創立 30 周年記念大会および祝賀会」，『同志社家政』，第 31 号，pp.58-59，1997
- 41) 宮澤正典：「家政学会創立 30 周年記念講演会（1997 年 10 月 4 日）もうひとつの家政学会」，『同志社家政』，第 31 号，pp.60-63，1997
- 42) 学校法人同志社：「同志社女子大学生生活科学部管理栄養士専攻 管理栄養士養成施設変更承認申請書」，1997（平成 9）年 6 月 4 日
- 43) a. 馬杉一重：「故 大西マサエ先生を偲んで」，同志社女子大学家政学会通信，No.39，p.2，1998／b. 馬杉一重：「大西マサエ先生を偲んで」，『同志社時報』，No.105，p.90，1998
- 44) a. 玉置日出夫：「今出川キャンパスの建物に思う」，『しばぐさ 学報第 38 号』，p.43，1999／b. 玉置日出夫：「無くなった研究室」，同志社女子大学生生活科学学会通信，No.40，p.4，1999
- 45) a. 上野 瞭：「渡邊英一先生を偲んで」，『同志社

- 女子大学生生活科学』, 第 33 号, 巻頭, 1999/b. 上野 瞭:「渡邊英一先生を偲んで」, 同志社女子大学生生活科学会通信, No.41, p.2, 2000 (再掲)/c. 酒井 康:「渡邊英一先生の思い出」, 『しばぐさ 学報第 39 号』, p.54, 2000/d. 深田尚彦:「渡邊英一先生追悼」, 『同志社時報』, No.109, p.84, 2000
- 46) a. 佐々木佳代:「坂本武人本学名誉教授を悼んで」, 『同志社女子大学生生活科学』, 第 33 号, 巻頭, 1999/b. 安川智子:「坂本武人先生を偲んで」, 同志社女子大学生生活科学通信, No.40, p.2, 1999/c. 紀 嘉子:「愛の経済学者・坂本武人先生」, 『しばぐさ 学報第 39 号』, p.53, 2000/d. 岩谷幸春:「坂本武人先生を偲んで」, 『同志社時報』, No.108, p.65, 1999
- 47) 同志社女子大学 125 年編集委員会〔編〕:『同志社女子大学 125 年』, 同志社女子大学, 2000
- 48) a. 川崎祐子:「長崎寿栄助教授を悼んで」, 『同志社女子大学生生活科学』, 第 34 号, 巻頭, 2000/b. 川崎祐子:「長崎寿栄助教授を偲んで」, 同志社女子大学生生活科学会通信, No.42, p.2, 2001/c. 臈谷 寿:「黄泉の国で何しているのー故長崎寿栄さんを偲ぶー」, 『しばぐさ 学報第 40 号』, p.57, 2001/d. 仲佐輝子:「言い尽くせぬ感謝」, 『同志社時報』, No.111, p.65, 2001
- 49) a. 森 淑子:「ふりかえりとささやき」, 『しばぐさ 学報第 40 号』, p.55, 2001/b. 森 淑子:「感謝をこめてーさるにさいしてー」, 同志社女子大学生生活科学会通信, No.42, p.4, 2001
- 50) a. 清水久美子:「片山登美子先生を偲んで」, 『しばぐさ 学報第 41 号』, p.60, 2002/b. 宮本義信:「片山登美子先生を偲んで 静かな先駆者」, 『同志社女子大学生生活科学』, 第 35 号, 巻頭, 2002/c. 宮本義信:「片山登美子先生を偲んで 静かな先駆者」, 同志社女子大学生生活科学会通信, No.43, p.2, 2002 (再掲)
- 51) a. 佐々木佳代:「上野瞭先生の『死の美学』」, 『しばぐさ 学報第 41 号』, p.61, 2002/b. 村瀬学:「上野 瞭先生を偲んで」, 『同志社女子大学生生活科学』, 第 35 号, 巻頭, 2001/c. 村瀬学:「上野 瞭先生を偲んで」, 同志社女子大学生生活科学会通信, No.43, p.3, 2002 (再掲)
- 52) a. 紀 嘉子:「家政学・生活科学にロマンを求めてー女子大学で 1962/2002ー」, 『しばぐさ 学報第 41 号』, p.57, 2002/b. 紀 嘉子:「同志社女子大学という学び舎で得たもの」, 同志社女子大学生生活科学会通信, No.43, p.5, 2002
- 53) a. 沖中 靖:「連続的か段階的か」, 『しばぐさ 学報第 42 号』, p.62, 2003/b. 沖中 靖:「はじめと終わり」, 同志社女子大学生生活科学会通信, No.44, p.4, 2003
- 54) a. 小原弘之:「松本先生を偲ぶ」, 『しばぐさ 学報第 42 号』, p.63, 2003/b. 仲佐輝子:「松本博先生を偲んで」, 同志社女子大学生生活科学会通信, No.44, p.2, 2003
- 55) 小川美恵子:「越賀玲子先生を偲んで」, 同志社女子大学生生活科学会通信, No.44, p.3, 2003
- 56) a. 阿部登茂子:「松山雄吉先生」, 『しばぐさ 学報第 43 号』, p.82, 2004/b. 阿部登茂子:「松山雄吉先生を偲んで」, 同志社女子大学生生活科学会通信, No.45, p.2, 2004
- 57) a. 宮澤正典:「辞去一言」, 同志社女子大学生生活科学会通信, No.45, p.4, 2004/b. 宮澤正典:「同志社回顧」, 『しばぐさ 学報第 43 号』, p.78, 2004
- 58) 宮澤正典:『同志社女子部点景ーそしてユダヤ論, ラグビー讀ー』, 宮澤正典 (私家本), 2004
- 59) a. 佐々木佳代:「楽しかったこと」, 『しばぐさ 学報第 44 号』, p.75, 2005/b. 佐々木佳代:「三十一年過ぎて」, 同志社女子大学生生活科学会通信, No.46, p.2, 2005
- 60) 吉田固行:「退職にあたって」, 『しばぐさ 学報第 44 号』, p.76, 2005
- 61) 清水久美子:「新たな生涯教育の場として」, 同志社女子大学生生活科学会通信, No.46, p.1, 2005
- 62) 学科史編纂委員会〔編〕:『音楽学科の変遷ーその誕生から半世紀ー』, 同志社女子大学学芸学部音楽学科, 2006
- 63) 同志社女子大学史料室〔編〕:『同志社女子大学寮の 100 年 1876~1976 私塾「京都ホーム」時代からの寮の変遷』, 同志社女子大学, 2006
- 64) a. 小原弘之:「雑感」, 『しばぐさ 学報第 46 号』, p.84, 2007/b. 小原弘之:「学生を大切に」, 同志社女子大学生生活科学会通信, No.48, p.2, 2007
- 65) 菊永省吾:「退職に当たって」, 『しばぐさ 学報第 46 号』, p.86, 2007
- 66) 同志社女子大学英語英文学会〔編〕:『同志社女子

- 大学英語英文学会 40 周年記念誌 1967-2007』,
同志社女子大学英語英文学会, 2007
- 67) a. 黒澤祝子:「同志社女子大学における私の半世紀」,『しばぐさ 学報第 47 号』, p.84, 2008/b. 黒澤祝子:「退職に当たって」,同志社女子大学生生活学会通信, No.49, p.2, 2008
- 68) a. 野崎康明:「楽しく・つつましく・ウェルネスに」,『しばぐさ 学報第 47 号』, p.85, 2008/b. 野崎康明:「楽しく, つつましく, ウェルネスに」,同志社女子大学生生活学会通信, No.49, p.2, 2008
- 69) 森田潤司:「同志社女子大学生生活学会 10 周年にあたって」,同志社女子大学生生活学会通信, No.49, p.1, 2008
- 70) a. 阿部登茂子:「感謝」,『しばぐさ 学報第 50 号』, p.90, 2011/b. 阿部登茂子:「同志社女子大学との絆に感謝」,同志社女子大学生生活学会通信, No.52, p.2, 2011
- 71) 宮澤正典:『同志社女学校の研究』, 思文閣出版, 2011
- 72) a. 清水久美子:「瀬古一光先生を偲んで」,『同志社女子大学生生活科学』, 第 45 号, iii-iv, 2011/b. 清水久美子:「瀬古一光先生を偲んで」,同志社女子大学生生活学会通信, No.53, p.2, 2012
- 73) a. 森田潤司:「故 岩崎良文先生を偲んで」,同志社女子大学生生活学会通信, No.53, p.2, 2012/b. 森田潤司:「岩崎良文先生を偲んで」,『同志社女子大学生生活科学』, 第 46 号, iii-iv, 2012 (再掲)
- 74) a. 今津屋直子:「木咲 弘先生を偲んで」,『同志社女子大学生生活科学』, 第 46 号, v-vi, 2012/b. 今津屋直子:「故 木咲 弘先生を偲んで」,同志社女子大学生生活学会通信, No.54, p.2, 2013
- 75) a. 清水久美子:「退職にあたって」,『しばぐさ 学報第 53 号』, pp.105-106, 2014/b. 清水久美子:「退職にあたって」,同志社女子大学生生活学会通信, No.55, p.2, 2014
- 76) a. 高原まり子:「退職にあたって」,『しばぐさ 学報第 53 号』, pp.107-108, 2014/b. 高原まり子:「退職にあたって」,同志社女子大学生生活学会通信, No.55, p.2, 2014
- 77) a. 仲佐輝子:「沖中 靖先生を偲んで」,『同志社女子大学生生活科学』, 第 48 号, iii-iv, 2015/b. 仲佐輝子:「故 沖中 靖先生を偲んで」,同志社女子大学生生活学会通信, No.56, p.2, 2015 (再掲)
- 78) a. 川崎祐子:「故 玉置日出夫靖先生を偲んで」,同志社女子大学生生活学会通信, No.56, p.3, 2015/b. 川崎祐子:「玉置日出夫靖先生を偲んで」,『同志社女子大学生生活科学』, 第 49 号, iii-iv, 2015
- 79) 岩谷幸春:「故 紀 嘉子先生を偲んで」,同志社女子大学生生活学会通信, No.57, p.2, 2016/b. 岩谷幸春:「紀 嘉子先生を偲んで」,『同志社女子大学生生活科学』, 第 50 号, iii-iv, 2016 (再掲)
- 80) 大塚 肇:「論評 宇宙時代と科学教育」,『しばぐさ 学報第 6 号』, pp.6-9, 1967
- 81) 坂本武人:「生活の科学化」,『しばぐさ 学報第 7 号』, pp.18-21, 1968
- 82) 松下紀美子:「同志社女子大学教育の将来への願い」,『しばぐさ 学報第 12 号 特集 女子大学の将来』, pp.10-12, 1973
- 83) 久次米哲子:「女子大学の将来を語るー主に家政学部に関してー」,『しばぐさ 学報第 12 号 特集 女子大学の将来』, pp.12-15, 1973
- 84) 小山松治郎:「論評 同志社女子大学と家政学」,『しばぐさ 学報第 13 号』, pp.6-7, 1974
- 85) 大塚 肇:「家政学部の教育課程ーカリキュラムの改正ーをめぐって」,『しばぐさ 学報第 14 号 論評 家政学部の将来の展望』, pp.15-17, 1975
- 86) 大塚 肇:「故 井上哲夫先生を偲んで」,『しばぐさ 学報第 14 号』, p.81, 1975
- 87) 木咲 弘:「家政学研究科に望まれるもの」,『しばぐさ 学報第 14 号 論評 家政学部の将来の展望』, pp.17-187, 1975
- 88) 小林五十鈴:「雑感」,『しばぐさ 学報第 16 号』, pp.38-39, 1977
- 89) 紀 嘉子:「同志社女子部百周年に想う」,『しばぐさ 学報第 16 号』, pp.39-41, 1977

〔資料 3〕

- 90) 日本家政学会〔編〕:『家政学将来構想 1984 家政学将来特別委員会報告書』, 光生館, 1984
- 91) 「同志社における家政学教育の変遷」,同志社女子大学教育基金, 1987⁹⁾
- 92) 家政学部将来構想検討委員会 (委員長沖中 靖):「家政学部将来構想について (答申)」, 1989
- 93) 今出川校地利用検討委員会 (委員長稲垣定広):「1991 年以降の今出川校地の利用について (答

- 申)], 1989 年 8 月 30 日
- 94) 杉田浩一:「家政学における大学教育充実のための指針－家政学における大学設置基準に関する特別委員会報告書－」, 日本家政学会誌, **42**, 391-395, 1991
- 95) 清野きみ:「視点 家政学を考える 11 家政学論考－家政学を考えるシリーズを読んで－」, 日本家政学会誌, **44**(No.12), 1073-1075, 1993 (注: 日本家政学会は「視点 家政学を考える」を日本家政学会誌, **44**(No.2-No.12), 1993 に 11 回に渡り掲載している。)
- 96) 日本家政学会将来構想特別委員会:「家政学将来構想 1994」, 日本家政学会誌, **45**, 451-478, 1994
- 97) 同志社女子大学特別委員会 (委員長小泉利久):「特別委員会答申」, 1992 年 12 月 21 日
- 98) 同志社女子大学改革委員会 (委員長今城淳行):「同志社女子大学改革委員会報告」, 1994 年 3 月 15 日
- 99) 家政学部改革委員会 (委員長森田潤司):「同志社女子大学家政学部改革委員会中間報告」, 1994 年 6 月 8 日
- 100) 家政学部改革委員会:「生活環境学部への改組転換趣旨 (案)」, 1994 年 7 月 15 日 (同年 7 月 16 日開催の家政学部教員会議資料)
- 101) 家政学科:「家政学科から人間生活学科への改組転換の趣旨 いまなぜ人間生活学か」, 1994 年 8 月 1 日 (1994 年 8 月 2 日開催の家政学部教員会議資料)
- 102) 学校法人同志社:「同志社女子大学家政学部および家政学部家政学科, 家政学部食物学科ならびに家政学部食物学科食物学専攻名称変更届出」, 1994 (平成 6) 年 12 月 2 日⁹⁵⁾
- 103) 常任委員会:『同志社女子大学の将来構想についての提案－「安定した財政基盤にささえられた魅力ある大学」をつくるために－』, 1995 年 12 月
- 104) 同志社女子大学将来構想委員会 (委員長寺川眞知夫):『将来構想委員会中間報告書』, 2000 年 6 月
- 105) 同志社女子大学企画部:『将来構想のための参考資料－21 世紀の同志社女子大学像を探って－』, 2002 年 7 月
- 106)「キャンパス利用計画について」, 2004 年 12 月 15 日開催教授会資料
- 107) 同志社女子大学企画部:『キャンパス利用計画について (資料編)』, 2004 年 12 月 15 日開催教授会資料
- 108) 同志社女子大学常任委員会:『同志社女子大学グランドデザイン－同志社女子大学の個性化の確立－』, 2005 年 10 月
- 109) 同志社女子大学史料室 [編]:『同志社女学校期報 (明治 27 年～昭和 17 年) 人名索引』, 2006
- 110) 同志社女子大学史料室 [編]:『同志社女子大学学報「しばぐさ」第 1 号 (1962)～第 34 号 (1995) 執筆者名索引』, 2007
- 111) 日本学術会議 健康・生活科学委員会家政学分会:「報告 大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準:家政学分野」(平成 25 年 5 月 15 日)
- 112) 日本家政学会家政学部:「学政学原論部会行動計画 2009-2018 家政学的ガイドライン [第一次案)」, 2013 年 8 月 20 日発行